
ニートな王とイエスな影武者

ハレルヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートな王とイエスな影武者

【Nコード】

N6281I

【作者名】

ハレルヤ

【あらすじ】

よくある異世界召喚ものです。

どんな頼み事もイエスと答えるイエスマンな大学生が突然異世界に召喚され、瓜二つな国王に外出るのダルイから代わってと言われ、安請け合いし国王になったはいいいけど問題は山積みだった。ファンタジーですが、魔法も魔物も魔王も出てきません。

プロローグ

「ここに置いとけばいいんですか？」

「ああ、そこにおいたらすぐに出ていけ。」

地方国立大学の研究室の一角では、生徒が教授の大量の資料や器具を部屋の隅にある棚に置いてる所だったが、その教授の態度は決して良いものではなかった。

この男、中村教授は男と女の生徒で態度が異なり、男には厳しく、単位も低評価の割になにかとき使い、女では好みのタイプには執拗にやさしくしてくるのでこの大学のほとんどの生徒から嫌われており、この男の頼みごと、もとい命令を聞く生徒はこの青年ぐらしいしかなかった。

「じゃあ、また何かあったら言ってください」

特に、この教授に不快感も持たないまま退室するとこの青年の行動をあまり良く思っていない馴染みの友人に呆れた感じで声をかけてきた。

「シュウ、また中村の雑用してんかよ。」

「うん、荷物多いから持てって。」

シュウと呼ばれた青年はこの大学ではいろんな意味で有名人だった。

困ったときに頼りになる男 相沢 修平と言えば大学内でも知らないものはいないぐらいなのだが、実質絶対に断らないから都合の良いヤツという輩も居て、その一人が中村だった。

「いろいろ、引つかるけど、まあいいや、飯食いに行こうや」

「…サトル…悪い、今月結構厳しいんだよね。」

サトルと呼ばれた青年は本名 西嶋 智 モデル顔負けのルックス、スタイルで人氣が（特に女の子）あり、性格も良いことから本当の意味で大学の有名人だった。

修、智もお互い友人は多い方なのだが、なにかと二人でいることが多く、いつも色々な噂が絶えることはなかった。

「ご飯の誘いは純粹にうれしかったのだが、給料日と仕送りまで10日、14日とまだ先は長く実質カツカツな状態だった。

給料は10万弱、仕送りは7万で家賃は親払いということもあり、たかが半月で底がつくほど、金使いは荒くない修であったが、原因はイエスマンな性格なためいろんな人に貸すためだった。

「そんな事だろうと思って、きちんと返してもらってきたぞ。」

親友の性格、行動はすべて把握しているため返す気があるうが、

なかつたが修が貸したお金は智が集金するという形を作っていた。

智が修に手渡した金額17万だった。

「あれ、俺こんなに貸してたっけな」
「まあ、いいか」

実質貸していた額は14万なのだが、修は貸した金額を覚えていないので、+3万は智流集金術の副産物だったりする。

「よし、じゃあ改めて飯に行きますか。」

時間も夜の8時と腹の虫が鳴く時間だったこともあり足早に智の車に乗り込み馴染みの店に向かうのだった。

「ああ、もう！ 普段、渋滞することないのになんかあったのか！」

「事故があつたみたいだね。」

車を走らせること10分、この通りをまっすぐいつてつきあたりに店があるのだが、渋滞でいら立つ智に修が窓から体を突き出すようにして確認した。

「時間かかるみたいだから、どうする…店替える？」

「いや、今日はあの店って決めてるからもう変更なんてできん！
…だったらちよつと遠回りになるが海岸通りに行ってもいいか？」

修からはイエスの答えしか基本ないので海岸通りを通ることになった。

走らせること5分、のんびりと海を眺めていた修が急に大きな声で叫んだ。

「車止めて！」

修の叫びで驚いた智は車を急ブレーキした。

「ど、どうした？」

普段大声は出さない修に動揺しながらも何があつたか状況確認をした智の質問の答えは「海で溺れてる犬がいるから助けてくるよ」というツツコミどころ満載だったので、おいおい冗談か？などと思っ
ているとすでに修は車から降り、海に飛び込もうとしていた。

「おい！ 修、その冗談笑えな」

言い終わる前に着水音があたりに響いた。

「…嘘…ってあいつカナズチだろうが」

と親友が泳げないことに気付いた智は車から急いで降りたが既にカナズチはあぶつ、あぶつ、と完全に溺れていた。

急いで飛び込んだ瞬間後悔した、服を脱がなかったことを…

黒い海が智を下へ、下へ、と引きずりこむような感覚に捕らわれたが何とか修を回収し、陸地に戻ろうとしたが、犬、犬、と叫んでいる修の言葉も無下には出来ず、修を抱えたまま、犬を掴んだ瞬間

『捉えた』という言葉が耳に響いた瞬間二人の意識は途切れていた。

一話

克蘭テユルドと呼ばれる世界、その中で最大の大陸である、アストール大陸の主要三大家のひとつであり、北西に位置するフルクエンド王国は存続の危機とも言える状態に立たされていた。

その原因は先王の死と新しく王となった人物に問題があった。

先王の遺言どおり順当に先王の息子で第一王子、齡19のアクセルが選ばれ、華々しくスタートを切るかに思われた。

しかし、街に住む者はおろか貴族ですら彼の姿を見たものはいなかった。

彼自信が会うと決めた人物以外会うこと叶わないので、今現在の彼を知る者はほんの数人程度だった。

会ったことも見たこともない王の存在は人々によって死亡説や本当は女説やもともそんな人物などいない説などの様々な仮説が立てられていた。

が、真実はアクセルがただ引きこもりというだけの話なのだが、今の所そついった仮説を立てているひとはいないとされている。

人口100万人を誇り、フルクエンドの政治、経済の中心地でもある首都バリッツの王城の一室では、そのほんの数人の人間と新国王が三日後に迫った大仕事についての話し合いをしていたのだが、新国王アクセルの「部屋から出るのヤダ！」の一言で早くも暗礁に乗り上げていた。

「三日後、国王就任披露パーティー並びに、王立広場での演説が控えています…部屋から出ないわけには行かないかと。」

ぱつと見て有能な秘書のような雰囲気を持つ女性、アクセルに十数年仕えてきた護衛兼教育係のエル・シンプソンが淡々と言い放ちメガネをくいとあげた。

「だから、前々から言っていたように姉上が僕の代わりに演説とパーティーに出席してくれば」

「何もかもエウレーネ様に頼りっぱなしという訳にはいきません」

「政策に関してはすべて請け負うつもりだけど」

「王の務めは政策だけでなく、国の象徴としての広告塔的な事もありますが」

なんとか反論しようと思ったアクセルだったが、確かに自分の姉であり、第一王女エウレーネに面倒事を押し付けているという事は自覚していたし、エルの正論攻撃の前では次の言葉が見つからないでいた。

急に黙ってしまったアクセルを見兼ねてか、さっきまで部屋の壁

に寄り掛かっていた若い騎士の男が助け舟を出した。

「14年間、部屋に閉じこもってたんだ…いきなり表に出てこい
つても酷ってもんだろ」

「フェーデ、貴方とエウレーネ様が甘やかすから外に出る機会を
潰してたんじゃないんですか」

「…甘やかしたつもりは…」

フェーデと呼ばれた騎士は凶星だったのか、ない、と言いきるこ
とができなかった。

フェーデは弟に甘いエウレーネの専属護衛騎士でもあり、アクセ
ルとは幼馴染の
係でもあるので、本気で嫌がるアクセルに仕方なく譲歩する事が多
々あり、最低でも5回はあった表に出るチャンスを潰したのでは？
という自覚はあったため言葉に詰まった。

親友の助け舟も不発に終わったのだが、アクセルはニヤニヤした
表情をしていた。

付き合いの長い二人には、この表情の意味を正確に理解していた。

（また、何か悪知恵を…）

（良い案浮かんだみたいだな）

二人の受け取り方はそれぞれ異なっていた。

「お前の言う事も偶には、聞いてやるか…政策と広告塔、両方国王の仕事という事は認めよう」

「へ？ 分つてくれたんですね！」

また、無茶な事を言われると思っていたエルは物分かりの良すぎるアクセルに呆気にとられながらも珍しく自分の意見を受け入れてくれたという事に素直に喜びをさらけ出したが、一瞬でも彼の言葉を鵜呑みにした事を後悔した。

「ということで、国王を分割させる…政策は俺がやるとして広告塔は影武者にやらせる」

この言葉でフェーデは大笑いをし、エルは頭を抱えたのだった。

「はあ、またアイツに振り回されてる気が…」

エルはアクセルのいつもの無茶ぶりに頭を悩ませていた。

彼の無茶ぶりは彼自身不可能と分っていることに限り、いつも任務失敗の報告の後に「これくらいの事もできないのか」と言われた後に最終的に妥協案として最初の彼の意見が通るという非常にタチの悪い作戦なのだった。

仮に奇跡的に任務達成できたとしても得するのは彼一人なので、

エルはいつも胃の痛い思いをさせられているのであった。

まあ、達成できたことなど一度もないのだけれど。

そして、今回、彼が出した条件と言うのが：

- 1． 伯父上に顔が知れているので、顔は完全にそっくりな事
 - 2． 体型、声も同じである事
 - 3． 秘密を順守できる者である事
 - 4． 平民から選り出す事
 - 5． 誰の助けも借りない事
- 達成できなければ厳罰に処す。

この文章から分る通り、鬼畜以外の何物でもなく、こういう時に限って王族としての権力を振りかざしてくるので、王族としてのアクセルに対しては良い思い出が何一つなかった。

もう、時間は深夜の時間帯を回っていることから影武者搜索は明日の早朝からやらなければならず、2日という期日の短さもあってかエルは深い、深いため息をつき、再就職を考えたとか考えなかったとか。

エルが頭を悩ませているのと同時刻、アクセルとフェーデはゴルドアの丘と呼ばれる場所で、星を眺めていたのだった。

この土地は彼の隠し部屋のひとつと地下で繋がっているしくみにな

っており、14年間引きこもって来た彼にとって唯一の外界だった。

丘の頂上には古代の賢者を祀っているとされるラピアスの剣という巨大なモニュメントがそびえ立っていて、それに背を預ける考え事を整理することが昔から好きだった。

二人はさっきのエルを話のタネにし、盛り上がっていた。

「今回もえげつない事考えたもんだな」 ……で、実際できると思ってたのか？」

「それと今回かぎりでこれも終わりだ…」

「…終わりってどういうことだよ」

アクセルの「そのままの意味だよ」という言葉でフェーデはエルの解雇という事に気付いたが、いままでそんな処分一度もなかったし、意味が分らなかった。

「もう、あいつも結婚を考えなきゃいけない年頃だろ？ ……いつまでも僕の御守をさせる訳にはいかないだろ」

アクセル独自の情報網からエルが縁談の話がかなり来ている事は知っていた。

彼自身会ったことのある女性が数人程度なので、気付いていないが実際エルは伯爵家令嬢にして王国貴族、他国の有力貴族の注目のでもある美人と認識されているので、政略的な兼ね合いからして

も、断り続けるにも限度がある事を知っていた。

「それに、俺の側にいるとエルは縁談断り続けそうだからな」

「お、お前、気付いていたのか！」

「そんな驚くことか？」

フェーデはアクセルがエルの気持ちを察している事に驚いていた。

今現在、大公爵であるアクセルの叔父の圧力の中、自分の身も危うい状態でエルとの婚約はマイナスの要素しかなく、シンプソン伯爵家の皆殺し、爵位剥奪などの危険性がある。

他の兄弟達の牽制もあるので、彼の花嫁には盤石な地盤と親族の圧力を撥ね退ける人が相応しく、自らの淡い恋心を捨て、大人な決断を下した青年に対して、フェーデは、今まで、親友、弟のような存在と思っていたアクセルに頼もしさと尊敬を再認識する形になった。

それならば、自分は親友を全力でサポートしようと考えていた所、

「やっぱ、手のかかる弟みたいのがいると結婚ってことに頭いかないんだな」

（あれ、嘘！こいつ何も分かってねーよ！俺の感動を返してくれよ！）

「ん、どうかしたか？」

「い、いや、なんでもないっ」

アクセルに恋愛は十年早かったと悟ったフェーデだった。

「そろそろ戻るとするか」

夜も更けてきたので、フェーデが戻る事を提案した。

アクセルはまだ居たそうな表情をしたが、体調を崩されるという人な人から酷い仕打ちを受けるので、当然の判断だった。

「二日後には14年ぶりに太陽さんにご対面か」

「お、お前！」

少し気恥かしかったのか、自分そっくりな影武者なんか居たら居たで、面白いかもななどと冗談めかして誤魔化した。

そんなたればを呟きながら夜も更けてきて体も冷えてきたので、また隠し部屋に向かう二人だった。

『汝の願い叶えたり』

そんな言葉と闇夜で不気味に光る剣には全く気付かないまま。

二話

「……あれ？　いつの間に寝てたんだ？　確か、海に……なんだ、夢だったのか？」

「どうやら、夢じゃないみたいだぜ、ほら、これ見てみる。」

寝起きの修は両目を擦りながら智の手に握られているものを見た。

「犬……の人形？」

「こいつに触れた瞬間に気を失って気付いたらここにいた。辺りを散策してみたが、来た事も、見たこともない所だった。それにあんな馬鹿デカイ剣の側で寝た記憶なんか皆無だ」

「ああ、あれだよ。まだ、夢の続きなんだよ。そういうことで、謎は解けたから俺寝るね」

状況を把握するのが面倒だったのか、じゃあ、おやすみと呟きながら本格的に二度寝を開始した。

「とりあえず、寝るのはやめなさい。知らない土地で二度寝なんて洒落にならないから」

智は相変わらずな友人に冷静にツツコミをいれると、今の現状を知るため人の居る場所を探す事を提案し、二人はこの場から離れることを決めた。

舗装された坂道を下ること5分、大きな街道に辿り着いた。

修は犬の人形が気に入ったのか時折、ぶんぶん振り回して遊んでいた。

智は辺りを見回し、お目当ての看板を発見したのだが、日本語で書かれている訳もなく、謎な文字の書かれた看板の前で立ちすくんでいた。

「期待した俺が馬鹿だったのか」

智が深いため息をついて、意気消沈していると修は日本でもお馴染みの動物を見つけた。

「まあ、そんなに落ち込まなくても。それに振り向いてごらんよ、犬がいるよ。」

「ん、野良犬かなんか……」

智は振り向いた瞬間、言葉を続ける事ができなくなった。目の前にいた犬の目線が自分と同じ位置にあり、大きな舌で顔を舐められたからだった。

何も考えられずに固まっている智をしり目に、修は犬らしき生物

に抱きついた。

「お前、ふかふかしてて気持ちいいな」

修が巨大生物と戯れている間にロングフリーズが解けたのか、正気に戻った智だが全身から汗が流れでていた。

「しゅ、修君、と、とりあえずその化け物から一旦降りようか、それ怒らしたら取り返し付かない事になるから、もれなく餌になるから！」

智の魂の叫びが伝わったのかしぶしぶそれから降りてきた。

「智、犬苦手だったっけ？」

「これを犬と認識できんのが凄いわ…」

「名前はそうだな…よし、今日からお前はポチ二号だ！」

「ネーミングセンスが昭和初期レベルだな。しかも、なんで二号！？」

「残念ながら、すでにポチはこいつの名前だからね」

智は修の手に握られた犬の人形を眺めた後、これからの事を考えれば考えるほど泣きたい気持ちになった。

とりあえず、大きな街道という事もあり、人が通るだろうと判断した二人はしばらくその場で待つことにした。

修はポチ二号に芸を教え始め、智は胸ポケットに入っていた煙草を吸いながら自分を落ち着かせていた所、小さな女の子の声が聞こえてきた。

「もう！先に行っちゃうなんて酷いよ、ガルガード！」

小走りでやって来た女の子の怒りの矛先はポチ二号に向けられていた。

「もしかして、この犬、君が飼ってるの？」

修が息を整えている女の子に話しかけた。

「うん、私の飼い犬でガルガードって名前なの。お兄ちゃんが捕まえてくれたの？」

「捕まえたというよりは一緒に遊んでただけだよ」

このまま修に任せていても犬の情報しか得られそうもないので智が腰をかがめて、女の子に話しかけた。十年後が楽しみな逸材だと不埒なことを考えながら。

「俺の名前は西嶋 智、こっちが相沢 修平で、歳は二人とも20だ。で、お嬢ちゃんは何って名前なの かな？」

「ニシジマサトル？アイザワシュウヘイ？なんだか変わった名前

だね」

「まあ、俺の事はサトル、こっちはシュウって名前だと認識してもらって構わないから」

「じゃあ、そう呼ぶね。私の名前はメルシア。メルって呼んでもらって構わないよ。あとお嬢ちゃんって言つのやめてよね。私、これでも15歳なんだから」

「「じゅ、15歳!？」」

どうみても12歳ぐらいにしか見えなかったので、二人はつい驚きを声にだした。

「……どーせ、私なんて発育不良のお子様ですよーだ、ふん!」

どうやら本人も気にしていることだったらしく拗ねてしまったようだ、そういうリアクションするからなおさら15歳とは思えないんだよねーとは言えなかったサトルは山ほどある聞きたい事を聞いていくことにした。

「ところで、メル、俺達すごーく世間一般の常識に疎いから色々聞きたいことがあるんだけどいいかな?」

「構わないよ。何でも聞いてね!」

頼られたことが嬉しかったのか、様々な質問に答えてくれた。

メルから聞かされる話でサトルの半信半疑だった考えが確信に変わった。

フィクションでしかありえないと思っていた異世界に来てしまったということ。

どうでもいい話だが、二人の長話の間にシュウが芸を仕込んだ賜物か、ガルガードは前転、バク転ができるようになっていた。

とりあえず、二人はメルに住んでいるこの国の首都であるバーリツツという所に一緒に行く事になり、サトルはメルから聞いたことをシュウに全て話した。

自分たちが異世界に来た事、この国と今から行くバーリツツについて、いつのまにかこの国の言語であるグルノース語が使えている事、あの巨大犬はこの国の感覚でも犬として認識されており、大きさも一般的な大きさで、ペットよりも主に馬車ならぬ犬車として乗り物としての役割の方がメジャーらしいということ、メルがガルガードと散歩中に置いて行かれた事を。

ちなみにサトルがもつとも驚いたことはガルガードが生後三か月のメスだという部分だった。

「異世界ね、まあ、おいおい元の世界に帰る方法でも探すとしてよいか」

「ずいぶん落ち着いてるな、…ショックじゃないのか？」

「……シヨックじゃないって言う嘘になるけど焦った所でどうなる訳でもないし、今はこの世界を　楽しむことにしよう」

「俺はお前のそういう所マジで尊敬するわ」

二人が小声で話していると前を歩いているメルが思いの他寂しかったのか、二人の会話に割って入ってきた

「さつきから何ぶつぶつ話してるのよ！私も会話に入れてよ！」

「大した話じゃないって。どっちがメルをお嫁に貰うか相談してただけだよ」

「なつ！　ふ、二人ともそんな目で私を！…でも、会ったばかりなのにそんないきなり…」

「そんなの関係ないだろ！」

「ふえ？…で、でも……」

サトルの言葉でメルの顔はどんどん赤くなった。

「メル、安心して。ただのサトルの悪い冗談だから」

シュウの一言で赤かった顔色は元に戻り、満面の笑みでサトルの方を向いたのだが、全身から殺意の意思が見て取れた。

「ガルガード、最近、爪と牙、研いでなかったよね。あれ使ってもいいから」

サトルがシュウのストップがかかるまでガルガードにボロボロにされたのは言うまでもない。

三話

「ほら、あれがバーリッツだよ。」

歩く事数分バーリッツと思われる建物が見えてきた。

「それにしても、でっかい壁だな」

「昔の戦争のなごりらしいんだけど、今は平和だから出入りも基本的に自由だから入れないなんて事　　ないよ」

「ねえねえ、さつきからガルガードみたいな犬が引いてる車が結構通ってるけど何かあるのかな？」

「そういえば、言ってなかったけど明日、新しい王様の即位式があるらしくて各国のお偉いさんが集　　まってるらしいから間違ってもトラブルは起こさないでね」

「へいへい、ん？入口はあっちじゃないのか？逆方向だぞ？」

「……あつちが高民区の入口、中民区は真っ直ぐ、低民区の入口は右側なの」

メルは少し暗い表情になったが低民区出身に対してのコンプレックス程度にしか思わなかった二人は軽く流すことにした。

低民区入口を入ると二人が思っていたのとは違い、貧困に苦しんでいる人やボロボロの住宅などはなく、人々も生き生きとしており、市場にも活気に満ちあふれていた。

高民区が貴族専用なのは変わらないが中民区、低民区に明確な差があるのは大昔の話であり、バーリッツの生活水準は高く、低民区の人々「貧しいというのは当てはまらない」。

実際、高民区に住む貴族よりも中民区、低民区に住む者の方が裕福なケースもあるらしい。

街についてメルから説明を受けていると普通の一軒家の前でメルが立ち止り、中に入って行った。

「ここが私の家だよ。ほら、入った、入った」

普通の一軒家と言ってもガルガードが走り回るのには十分な広さの庭を持つ立派な家だった。

「お母さん、ただいま」

「メルちゃん、お帰りなさい。いつもより遅かったから母さん心配したわよ」

「へえ、寝ながら心配できるなんて器用な人だね」

「うっ！ばれてたか。だ、だって二度寝気持ちいいんだもん。それより、朝ごはん作って、母さん お腹ぺこぺこよ」

「もう、昼ごはんに入入するけどね」

「うう、メルちゃんがいじめるよ。って、お客さん？ごめんなさい、みっともない姿さらしちゃ　　って。メルシアの母のアリシアといいます。気軽にアリーちゃんって呼んでね」

メルシアの母である人だから美人であることはある程度想定していたサトルだったが予想のレベルを超えていた。

どうひいき目に見ても仲の良い兄弟にしか見えず、化粧なし、寝起きで髪もぼさぼさきみなどはまったく関係なかった。

「アリシアさん、惚れました。俺と結婚を前提にお付き合いをぼふ！」

シュウの本気が冗談がよく分らないアプローチは娘の鉄槌でなかったことになった。

「あれ！材料ぜんぜんないじゃん、確か、まだあるはずなのに」

「ごめんなさい、小腹が空いてついつい」

もはやどっちが娘で、どっちが母親かわかんなくやり取りが交わされていた。

「また」。やめろってあれ程言ったのに。…しょうがないから、

市場で買ってくるからちよつと待つ　　てて」

「じゃあ、俺もついて行っていいかな、興味あるし」

「そういや、シユウは料理好きだったな。じゃあ、俺は留守番してるわ」

「言つとくけど、母さんに手だしたら分るよね……」

「そんな殺気込めなくても……」

「とりあえず、信用したからね、じゃあ、行こ、シユウ、ガルガード」

という事で、市場に向かう事となった二人と一匹だった。

低民区市場に向かう途中で人だかりができていたので、野次馬根性なのか見に行くことになり、近寄ってみると上等な生地 of 服に身を包んだ青年と小さな女の子との間で争いが起きたらしく、その母親と思われる人がこれでもかという程頭を下げていた。

「おい、ガキ、この壺が一体いくらすると思っている。貴様の様な愚民が一生働いても稼げない額だ　ぞ」

「も、申し訳ございません！どうかこの子だけはお助けを！」

「殺さねば、私の気が治まらんわ！」

うわゝ、ベタな貴族とこんなに早く遭遇するとはなどと思って周りを見てみると、どの市民も貴族の時代錯誤な態度に怒りを覚えていても助けようとはしなかった。

いくら市民の生活水準が上がったとしても長い間刷り込まれた貴族に対する恐怖心が簡単に無くなるものでもないのだらうと冷静に分析しているとメルシアとガルガードが貴族の前に立ちはだかっていた。

「これだから貴族は嫌いなよ！たかが、壺の一つや二つで人を簡単に殺すなんて。頭おかしいんじやないの」

「貴様、私をフェイル子爵と知つての狼藉か！まあ、その度胸は認めてやるが、それ以上私を愚弄すればただでは済まさんぞ！」

一瞬怯んだように見えたメルだったが、それでもなんとか恐怖に耐え、再び、叫んだ。

「どうなるって言うのよ！この馬鹿貴族！」

「まだ言うか、面白い。だったら特別に許してやらんこともない」

「ほ、本当？」

「条件付きだがな、実はさっきの壺はプレゼント用に買ったものなのだ。しかし、その壺はもうない。だが、プレゼントを渡す相手は大の犬好きでな。見たところその犬は貴重な白犬、しかも、私でも見た事のないほど美しさだ。言ってる意味分るだろ

？」

「そ、それは……」

「さっきまで人の命は壺より価値があるといいながら、自分の犬は人の命より価値があるようだな」

自分の発言の矛盾を突かれたメルシアは口が開いても、言葉が何もでてこなくなっていた。

シユウはと言うと、この卑怯な貴族に怒りを燃やしている……訳でもなくなぜか必死に笑いを堪えていた。

（時代劇でよくある感じの展開だよな、貴様の娘を貰うぞ的な、ぶふっ、今回は犬だけど、ダメだ、笑っちゃ。なんか失礼だし）

そんな笑いを堪えるシユウをしり目にじっとしていたガルガードは状況を把握していたのか貴族の前まで歩み寄ると頭を下げた。

この行為はこの国では犬が主と認めた者に対してとる行動であり、彼女は自ら貴族の物になることを決断したのだ。

「賢い犬だ。ますます気に入った。」

そう言うのと、貴族は手を挙げ何かの合図を出した瞬間、大きな銃声が辺り一面に響いた。

撃ったのは貴族の従者と思われる男だった。

その場に数秒の沈黙が流れた後、メルシアは掠れた声で呟いた。

「どうして？ どうして打ったの！？」

「安心しろ、麻酔銃だ。暴れられても困るしな。ガニエ、このみすばらしい女とガキを

せ。」

周りの人間は「約束が違うぞ」、「卑怯者」、「などのヤジを飛ばしたが貴族の人ならみでみんな黙ってしまった。

「約束が違うじゃない！」

「確かに約束はした。だが、お前は果たしてないだろ。お前差し出したのではなく、犬が自ら来たんだ。だから、犬は俺の物、こいつらは殺す。それだけの話だ」

「酷い……」

あまりのショックに気丈に取り繕っていたメルシアは泣き出してしまった。

「泣けば許して貰えるとしても…泣いたって現実は何も変わらないし、誰も助けてくれないんだよ！」

男がそう言い終わった瞬間ついにシュウの怒りの……ではなく、笑いの我慢が限界に達した。

シュウの大爆笑がシンとした空間で木霊した。

「笑ってるのは、お前か。この状況で笑えるとはずいぶん酷い奴もいたものだな」

「いやいや、誤解、誤解。お前が面白すぎてさ。だって典型的な咬ませ犬キアラだからさ。お前、最高」

「お前も死にたいようだな」

「ぶふっ、あ、ごめん、ごめん、俺も簡単には死にたくないしさ。決闘しよう」

「お前、結婚しようみたいなのりでいってないか」

「いや、結婚しようもノリで言えるもんじゃないだろ」

「そういえばそうだな……じゃ、なくて！決闘と言ったからには、もう逃げる事は出来んぞ！」

「ああ、俺が勝ったら全部白紙、お前が勝ったら好きにしろ」

メルシアはシュウが来てくれたことには嬉しかったが、決闘の流れになると顔面蒼白になった。

シュウが勝つとは到底思えなかったからだ、相手は帯刀、服装から考えて軍人、その一方シュウは普通より細めのひ弱な男。勝負は見えている。

「では、始めるぞ。決闘開始！」

フェイルは腰に下げたサーベルを抜くとすばやくシュウに接近し

て一突き。

からうじて交わしたシュウは相手と距離をとるが地面に座り込んでしまった。

「大口を叩いた割に大した事ないんだな。これで、決める。」

立てなくなったシュウに近付き、止めの二撃目を加えようと振りかぶった瞬間、

「必殺砂掛けええええええええええ！」

密かに握りしめた砂をフェイルの顔面にかかり、眼の中に砂が混入すると反射的に目を閉じた。

シュウにはその間だけで十分だった。

下からフェイルの顎目掛けて平手打ちを打ち込んだ。

顎を打ち上げられたフェイルは白目を剥いて地面に倒れるのだっ
た。

「これでおれの勝ちが決まったな」

周りを囲んでいた人々は拍手喝さいでシュウの勝利を受け入れたのだが、シュウは街をパトロール中の一般兵達に取り囲まれた。

「おとなしくすれば、手荒な真似はしない。ついて来てもらおうか。」

「これは白紙にはなんないのね。メルシアちょっと行ってくるから先帰ってて」

屈強な兵士のオジサン達に連行されるシュウと担がれるフェイルをを啞然と見つめる事しかできなかったメルシアだった。

四話

シュウが兵士に捕まる少し前にエルは王の無茶ぶりからここ二日間、碌に睡眠も取らずに中民区、低民区を歩きまわっていたが王の顔は伏せられているので人に聞く事も出来ず、心はへし折れかけていた。

「一番楽な死に方って何かな？水死？飛び降り？それとも原始的に切腹かな…やっぱり絞殺か銃殺かベターだね……ふふふ、何か楽しくなってきたわ」

すでにへし折れていたのか、物騒な事を口にするエル。

低民区の市場は昼時の時間帯ということもあり、たくさんの人で賑わっていたが、暗いオーラを辺りにまき散らし、ぶつぶつと何かを呟いている女を気味悪がりエルの周りには見えない壁があるのか、誰も近寄ろうとしなかった。

目を合かしちゃだめよ、という母親が子供抱えて小走り去っていく姿もみられるぐらいだった。

まだ、半日あることから腐りかけた心を一新するためか、顔をパンパンと叩くと、再び影武者探しに勤しもつと決めたところで、近くで銃声音が聞こえた。

治安も特別悪くない街での物騒な音に本来の任務ではないものの反射的に音の発生した場所に駆けつける。

その現場に駆け付けたエルが見たものは大声で叫ぶ男と恐怖で縮みあがった親子と泣いている女の子と銃の犠牲となった倒れた犬だった。

その男はエルがよく知る人物だった。

フェイル公爵の長男であり、旧貴族的な考え方の根強いこと有名なフェイル子爵だった。

王の補佐であるエルといえども簡単にどうにかなる相手ではなかった。

尻込みするエルをよそに大きな笑い声が聞こえてた。

その男を見た瞬間、衝撃が走った。

彼女の良く知る人と同じ顔、同じ声、似た体型、一卵性の双子と言っても遜色ない人物だったが、髪の色はアクセルと真逆の黒髪、肌も健康的な色だった。

これは神の思し召し、後光が、などと驚きと嬉しさの混じった変な感覚にとられ、しばらく自分の世界に入っていると、辺りがざわついた。

どうやら、決闘という形になったらしくフェイルが剣を構えるところだった。

せっかく見つけた標的を殺されては困ると思い、決闘をやめさせようと思ったがすべて杞憂に終わった。

目の前の光景は立っているそっくりさんと倒れているフェイル子爵。

正式な決闘なので、お咎めも受けないので早くコンタクトを取ろうと思ったが、遅れてやってきた兵士が騒ぎの原因として彼とフェイルを連行してしまった。

追いかけてようとしたが人の波に流され、思うように動けず、標的は見つかったという安堵もあり、泣いている女の子に事情を聴くことにした。

「ねえ、あなた、事情を説明してもらえるかしら」

「ふええ、…ぐすつ、…えぐつ、…ひつく……」

泣いてる女の子を落ち着かせるとさっきまでの出来事をすべて話してくれ、エルはようやく出来事の全容を知ることが出来た。

エルは女の子と親子には後は自分に任せてとりあえず帰るように諭し、近くにいた兵士にさっき連行された者の行き場を聞き、この場の收拾を任せた。

初めてあの性悪幼馴染の驚いた顔を拝めることができると考えると、嬉しくてしょうがないのか顔の緩みを直す事もなく、意気揚々と標的の回収に向かうエルだった。

一方、シュウはというと街の警備担当の詰め所の端っこで取り調べを受けていた。

これぞ、男の職場と言わんばかりの脱ぎ散らかった服、所々、散らばっている食べ物のカス、乱雑に置かれた書類や武器・防具、換気もしていない濁った空気、部屋全体が埃まみれで、武骨な男達の下品な会話が聞こえてくるこの部屋に長時間いたくなかったシュウはソワソワしていた。

しかし、取り調べ担当の壮年のいかつい兵士はやましいことがあるからソワソワしていると勘違いし怒気を強めた。

「おら！とつとと、喋った方がみのためだぞ！」

ドン！と握り拳を机に叩きつけたが思いのほか強く叩きつけすぎたのか痛いのを必死で我慢していた。

幸いシュウは気付かなかったのか、笑う事はなかったが別の要件で我慢の限界にきていた。

「もう、だめだ！こんな部屋居たくない！お前ら、掃除開始するぞ！」

啞然とした兵士たちだったが、シュウの鬼気迫る表情に押されたのか取り調べそっちのけで掃除を始める事に。

聞くところによると掃除をした記憶がほとんどなかったらしく、部屋は魔窟同然だったが、シュウの指示のもとだんだんとまともになっていった。

一人の兵士が手の着けてない所に手を掛けた瞬間、ハワイ島クルスのGが数匹出てきて部屋の男達は大パニックに陥った。

詰め所でそんなことが起こっているなど全く知らないエルは扉を開いた。

「まったく何騒いでるのですか？失礼しま…ひ！……」

エルの目の前をG達が横切った瞬間、彼女の意識はホワイトアウトしたのだった。

G騒動も掃除も片が付き、兵士達はきれいな部屋で大変リラックスしていた。

シュウはさっきの謎の美女をほっとく事も出来ず、簡易用のベッドで置くとუნなされている彼女の様子を見ていた。

シュウが部屋から出ようとしたら女は気がついた。

「私は寝ていたのか？そ、そういえば最近寝不足だったからな」

クールな雰囲気の女は倒れた理由を誰も聞いてないのに説明した。

「そうだったんだ、Gが怖くて気絶したのかと思ったじゃん」

「そ、そんなことある訳ないだろ！この私がゴキ…虫ごときに…」

女の声は明らかに上ずっているがシュウに気付いている素振りは見られなかった。

「ここは？」

「やっと起きたか、え、え」と、ファイル男爵？」

「フェイル子爵だ！名前も違う上に爵位を下げるな。まったく、これだから愚民は。」

「相変わらず、前時代的な考え方の持ち主ですね。貴族が偉ぶる時代は終わったのですよ。女の尻を追う事しか能のないくせに」

「エ、エルフィシア！お前がなんでここに！」

「この御方の御向かいに來ただけです」

俺？と知らない女に向いに來られた事に疑問に思っているシュウの耳元に囁くように「私の話に合わせて」と言っただ。

「こんなこの馬とも分らない奴になんの用なんだ」

「貴方も貴族の端くれなら言葉使いには気を付けなさい。これから国を背負う御方に対して」

「……ま、まさか、アクセル様…そんな部屋に籠りっきりと聞いているのに……」

「王になるにあたり一人で街の視察がしたいとおっしゃったので」
フェイル子爵は全身の力が抜けるように崩れ落ちた。

「まさか、陛下がこんな見たこともない格好で、低民区を歩いているとは…陛下、先ほど数々の無礼　なにとぞお許しくださいませ！」

さつきと打って変わり下手に出てきたフェイル。

「じゃあ、さっきの人達に謝って許しを得てきたら不問にするよ」

「わ、分かりました！迅速に行ってまいりますっ」

シュウの条件を聞くとすぐに詰め所を出て行った。

「何か態度が180度変わったな。あいつ」

「ヘタレなだけです」

とりあえず、シュウは自分を陛下扱いした理由を聞いたのだが、ここでは説明できないらしく、エルフィシアについて行くことになった。

ちなみに、連行した青年が陛下と聞かされた兵士たちは交代が来るまで固まっていたらしい。

「あの……エルフィシアさん？さっきの訳を聞きたいんですが。」

「私の事はエルとお呼びください。あと、敬語はやめる方向でお願いします。聞かれてはまずい事なので目的の部屋に着いたらお話します」

今、シユウが連れて行かれた場所は首都バーリッツのもっとも大きな建物であるソルフォート宮殿である。

敷地内は広すぎる為か宮殿に入ってからかれこれ一時間はあるいており、不意にシユウのお腹の虫が鳴きだした。

そういえば、この世界に来てから何も口にしてない事を思い出した。

「申し訳ございません。後で食事の用意をさせますので」

少し歩いた所で、他の部屋の扉に比べると質素な作りの扉の前でエルが窪みに手をかざすと扉が開いたが部屋には誰もいなかった。

「誰もいない……」

「まあ、ここは表向きの部屋ですので陛下はここを使ったことはございません」

「使ったことないってどういことですか？」

「まあ、見てください」

エルが壁の前で何かをぶつぶつと呟くと壁が扉に変化し、再び窪みに手をかざし、開いた中は、一畳程度のスペースしかなかった。

エルに導かれるまま中に入ると、今度もエルの声に反応したのか、狭い部屋全体が浮遊感に包まれた。

「地下!？」

「ええ、これは昇降機と言う陛下の発明品です。地下に複数の部屋がありだいたいそこに潜んでいます。今日は地下五階の506の部屋にいるようですね」

「なんで俺が国王と会わないといけないんですか？」

「会えば、すべてが分りますよ。確実に驚く事になるとおもいますが」

すでに驚いているシュウだったが、エルの言う驚く事が気になったのかあれこれと考えていた。

「この部屋です。陛下、私です」

部屋の中に入ると、何かに集中している白い髪的青年?が振り向きもせずに答えた。

部屋の国王の部屋のイメージなど皆無で、大量に積み重なった難しそうな本、何に使うのか分らないガラクタ?などが転がっており、簡素なベッドとテーブルが置いてあるだけだった。

「エルか、ずいぶん根を上げるのが早いな。厳罰の件だが、今日」

白髪の青年が言いきる前に、エルが得意げに答えた。

「今回は私の勝ちですよ。完璧な影武者候補を見つけてきましたから」

「適当に連れて来たって認めないからな」

白髪の青年が振り向くと、大きく目を開き動かなくなった。

そして、シュウも同様の反応をしていたので、エルは思わず、笑ってしまった。

「反応まで一緒とは、最高の影武者になると思いますが」

「ど、どうなっている！僕はいつの間にか分裂したのか！？」

「そんな訳ないでしょうに。私が低民区で見つけて来たんですよ。髪の色は異なりますが、認めてくれますよね？あ、瞳の色も同じ黒ですよ。」

「似すぎていて気味が悪いな。まあ、確かに合格点だな。しかし、さつきからキョトンといった感じが見られが、エル、お前、説明もせずに連れてきたなんて言わないよな」

「うっ！そ、それは…」

白髪の男の鋭い指摘にギクツと分りやすい反応を見せたエルは急にしおらしくなった。

「見つけた喜びで冷静な判断もできず、碌に説明もせず、承諾も得ず、勢いに任せて連れて来たとい　う事か」

「あう」

どうやら凶星だったのか言葉なくうなだれるエル。

その様子を見ていたシュウはクールな印象のエルの意外な可愛らしい一面に思わず吹いてしまった。

「……笑われてるぞ」

「言わないでください……。一生のお願いです！影武者になりますと言ってください」

エルは振り向きざまにシュウの両肩を掴み、潤ませた瞳を上目使いにしてすがってきた。

断ると泣き出してしまいそうな感じだったし、「お願い」というワードがシュウの耳に響き、いつもの癖で二つ返事で了承してしまった。

白髪青年、アクセルは情けないエルに呆れながら、一度覚悟を決めた手前複雑な心境だったが、影武者がいたらいつもの生活が出来るし、まあ、いいかと考えを改めるのだった。

五話

正式に影武者となったシュウはアクセルとお互いに自己紹介した後、食べ物の催促をしたところ、食事をしながら、お互いの事、これからの事について話し合う事となった。

「では、食事を取りに行つてまいりますのでしばらくお待ちを」

「いちいち上まで取りに行くのは時間掛かるし、これでいいだろ」

アクセルが出したものは、バケットのようなパン、チーズ、干し肉と王が口にする物としては非常に質素な物だった。

「また、そんな物を！フェーデの仕業ですね！もう少し栄養のある物を食べてもらわないと」

「ナイフ、フォークでちまちま食うの面倒くさいんだよ」

「あなたがそれで良くてもシュウ様が納得する訳ないでしょう。」

シュウはと言うと旨そうにパクパク胃の中に入れていた。

「お気に召したようだぞ」

「……コーヒーの用意してきます」

コーヒーの準備の為、エルは部屋を出て行った。

この世界にもコーヒーあるんだなと思っていた所にチーズに噛り付いていたアクセルが話しかけてきた。

「とりあえず、今の現状と注意点を説明しておきたい。シュウ、この国の印象はどうだった？」

口の中の食べ物を咀嚼し、少し考えた後にこう答えた。

「そうだな、ほとんど低民区しか見てないけど、かなり豊かな国なんじゃないかな。生活水準もよその国に比べて高いらしいし」

「それはすべて天然資源の賜物だ。この国は天然資源の宝庫と呼ばれ、鉄、金、銀、銅、宝石の原石、石炭が大量に取れていたのだが、先王、俺の親父が大量に掘り上げた結果、このままだと10年以内に鉄と金が無くなる計算になっている。」

「でも、他のがまだ、大丈夫なんじゃ？」

「鉄と金はこの国の経済の主力。それが尽きれば大打撃だ、それに、他の物も無限じゃない。経済面は大ピンチだ。しかも、問題はそれだけじゃない。」

「まだ、あるの？」

「元々、王族の間でも俺はいないも同然の存在。誰も俺が王になると思っただけだし、俺もなるつもりはなかった。」

「ホントにやる気ないんだね、もしかして、納得いつてない連中から命狙われるとか？」

シュウは軽く冗談のつもりで言ったのだが、アクセルの反応から当たりを引いたらしく啞然とした。

「特に親父の兄弟とそいつらの子供が反発してるみたいだから俺を殺してでも王位に就こうとするし、大規模な内乱なんか起こったら国は混乱、他国に付け入る隙をを与えることにも繋がってくる」

シュウは想像してなかった事実面に面食らったが、言葉を続けた。

「だから、俺に身代わりになってほしくて影武者を？」

「いや、純粹に部屋から出て色々すんのが嫌なだけなんだ、出来れば一生部屋から出ないで、本を読んで居たかったのに」

「絵に描いたダメ人間じゃないか。でも、結局のところ俺の命が危険なんじゃ？」

「そうならない為の秘策を俺が持っていないとでも？」

アクセルがポケットから何かの石を取り出した所でエルが再び部屋に入ってきた。

「コーヒーをお持ちしましたよ」

二人の前にコーヒーを置くと、自分の分を手に取り席につくエル。

シュウは秘策について聞こうとしたが、ザザアとした音が聞こえてきたので、音の発信源を探していると、ミルクと大量の砂糖をコーヒーに詰め込んでいるエルの姿を見て、なんだか見てはいけない物を見てしまった気分になってしまった。

そんなシュウの視線に気付いたエルは何かいい訳を探していたのか

「ア、アクセル様！いつものが出来上がりましたよ」

「そんなもん飲むのお前だけだろうが！糖分過多で死ね！」

「砂糖はいくら摂取しても死なないと父も言っておりまして！」

「いや、お前の親父糖尿らしいじゃん、説得力ねえだろ」

「うっ、そ、それは……」

彼女が甘党ということは分かったが脱線した話を元に戻す事無く、数十分の間不毛なやり取りが行われてしまった。

「で、秘策についてききたいんだけど？」

待っていても終わりそうになかったので強引にシュウが言葉をねじ込んだ。

「悪い、悪い、秘策はこの石だ」

アクセルが取りだした石は魔鉱石と言う物だった。

この石はどこにでも落ちていて、鉱山では大量に取れてしまうため無価値に近く、他の価値ある資源の発掘の邪魔にしかならないため、いつしか鉱山のゴミと言われるようになったという。

シュウは石の説明を受けたがそんな無価値な物を一体どうするか考えていたら、アクセルが続きを話し始めた。

「この石は非常に脆くて宝石のように加工しても壊れてしまう。しかし、14年間引きこもって来た俺は 暇だったこともあり、魔鉱石の加工方法を編み出した。」

「でも、濁った色してるし、とても売れそうな物には見えないけど」

「そりゃ、宝石じゃないしな。魔鉱石には様々な種類があり、今のところ赤、青、黄、緑、黒、白が 見つかっている。まあ、見た方が早いかな」

そう言うと、アクセルは青の石と白の石をくっ付け、すばやく目の前にあったパンに突き刺した。

すると、ひんやりとした冷気が感じとられ、カッチカチのパンが出来上がった。

「こ、凍った!？」

「その通り。これを利用した製品を大量に生産すれば国は潤い、14年間表に出なかったのも国の先を 見越し、研究に勤しんで

いたと発表すれば、反発者も抑えられるという寸法だ。」

「でも、物を凍らせることぐらい魔法とかで皆やってるんじゃないの？」

「魔法？」

シュウの唐突な発言で驚いたのか、アクセルとエルがきれいにハモツた後、二人に笑われてしまった。

「魔法なんか使える奴いるわけないだろ。遙か昔は存在していたらしいが、エルフ族でも使える奴存在しないよ。そんなの常識だぞ」

「…魔法ないんだ……、せっかく異世界に来たから魔王や魔物とかもいて魔法とかも使えるものかと 思ってたのに」

「……………冗談だよな。」

「……………冗談ですよな。」

シュウの発言に二人はお互いに確認するかのようをしていた。

彼が異世界人と思わせる材料がいくつか見られ、冗談を言っているような雰囲気じゃないにしろ発言がぶっ飛び過ぎたのだ。

「あはは、この世界と違う世界から来たのは冗談じゃないよ。この世界にも今日来たばかりだし、友達と一緒に来たんだ」

「もう一人いるのか？」

「うん、出来れば友達もこっちに呼びたいんだけど…ダメかな」

「今すぐという訳には…その方の宿のほうは？」

「一応、今日知りあった人の家にお世話になってると思うけど」

「もしかして、広場にいた女の子ですか？」

「そうそう、エルもあの広場いたんだね。メルシアって言うんだよ」

「では、後日そのメルシアの家に訪ねて見るのはどうでしょうか？」

「じゃあ、そうするよ」

「シュウ、早くお前の世界の話聞かせてくれ！」

アクセルは二人の会話が落ち着くとすぐにシュウの話を強請った。

その後、シュウの次から次へと出てくる聞いたこともない言葉などを聞かされたアクセルは日本の科学力に興味を持ち、数時間に及ぶ質問責めを受ける羽目になってしまった。

エルがアクセルの質問攻めを止めたのが深夜に差し掛かった時刻と言う事もあり、フラフラした様子で、上の階にある表向きの国王の部屋のベッドに突っ伏し、数秒で寝息を立てながら寝てしまった。

「おい！その兄さん、さっさと酒持って来い！」

「はいはい、今行きますから！」

シュウがアクセルに質問責めにあっているのと同時刻、メルシアの家でお世話になっているはずのサトルは低民区のとある酒場で働いていた。

「はあ、異世界に来てやってること日本に居た時と変わんないつてのもなんだかな……」

「ごめんなさい、サトル君、何から何まで迷惑かけちゃって」

「いえいえ、それなりに楽しくやってますから」

今、彼はメルシアの母、アリシアの経営する酒場でアルバイトに勤しんでいた。

日本でも居酒屋のアルバイトをしていた為、そつなく仕事をこなしていたが、ぶつぶつとメルシアに対する恨みごとを呟いていた。

こうなったのも昼間のやり取りが原因だった。

あまりにも帰りの遅いメルシアとシュウを心配していた二人は半べそをかい、一人で帰って来たメルシアに驚かされた。

「ど、どうしたの！メルちゃん！？シュウ君は一緒じゃなかったの？」

「メルシア！まさかシュウに悪戯されたんじゃない？あいつ、ぬけぬけと〜！」

アリシアとサトルでは、心配のベクトルに大きなずれが発生していた。

母親の元に帰って来た安心が再び泣きじゃくってしまったメルシアだが、母親の慰めもあり、落ち着きを取り戻すとさっきまでの出来事をすべて話してくれた。

「でも、シュウ君なにも悪い事してないんだから、すぐに帰ってくるわよ」

「そうそう、基本あいつに関しては心配しなくてもいいぞ」

「サトルは心配じゃないの。貴族は何するかわかんないんだよ」

「いつつも人を心配させた後、凄いことして皆をびっくりさせるからな」

「そんなの出来っこないよ、どーせ貴族の罪を着せられてお父さんみたいに殺されるんだ！」

サトルは街の入口近くで、メルシアの暗い表情の理由が父の死である事を知った。

メルシアが8歳の時、猟師をしていた父親が貴族が犯した犬殺し

の罪を擦り付けられて、死罪になったからだった。

犬は運搬、移動にだけ繁殖しにくいこともあり、貴重な存在であり殺すことは重罪だった。

のちのち、貴族の処罰もあつたらしいが、軽い罪に済んだらしく、メルシアにのこされた物は貴族に対する深い憎しみと一匹の子犬だった。

この日の事を忘れないために、父に対する寂しさも相まってこの子犬は父の名前と同じになっている事をメルシアは話してくれた。場が湿っぽくなったので、どうにかしようとシュウが試行錯誤していた時、誰かが訪ねてきた事に気付いたアリシアが扉を開くと軍服を着た貴族風の男と年老いた従者が立っていた。

「あの、どちらさまで？」

「あんたはさっきの馬鹿貴族！」

「え？あいつがそうなの」

こいつがメルシア泣かせた奴か、とガツンと言ってやろうとサトルが近づくとしたさなか、貴族と従者は片膝をつき、頭を下げてきた。

「本日は私、フランツ・オブリージュ・フェイルロードが誠に無礼な事を！本当にすみませんでした！」

とんでもない勢いで謝って来たことに啞然としたサトルだったが、

この男の無駄に張った声にメルシアは怖かったのか、震えていた。

それに気付いたアリシアが代わりに笑顔で応対した。

「あら、わざわざお貴族様が謝りに来てくれるなんて。明日は槍が降ってくるのかしら（刺さって死ねばいいのに）。メルちゃん怖がってるからもう謝りに来て下さなくても結構ですよ。（来たら殺す）。ガルちゃん、お客様の送迎（黄泉送り）頼みましたよ」

言い終わった後、ピシャツと扉を閉めると、犬の唸り声と断末魔の叫びが聞こえたとか。

その光景を見ていたサトルは、微かに聞こえた物騒な言葉は幻聴と思い込み、アリシアを決して、決して、怒らせない事を魂に刻み込んだ。

ちなみにメルシアの震えは当分の間止まらなかった。

そんなこんながあり、アリシアが仕事に出かけたところで、サトルのアルバイトすることになった原因でもある出来事が起こった。

「ふ、二人きりになったからって私に指一本でも触れたら承知しないわよ！」

「安心しろ、お前みたいなお子様に興味なんてあるわけないだろ。俺、ロリコンじゃないし」

「...お子様、...興味ない...:.....いけ」

「何か言ったか？」

「出ていけー！この馬鹿ー！」

何に怒ったのか訳が分からないまま、鍵を閉められ、一時間経つても入れてくれそうになかったので、アリシアの店に頼って来た所

「サトル君、良い所に来たわね！アルバイトの子が急病で人足りなかったの。お手伝いして貰えるかしら？お給料もあげるし、食べ物とお酒も付けるからお願い」

まくし立てられたためだった。

サトルの異世界初日はアリシア、メルシア親子に振り回されて幕を閉じたのだった。

六話

「要注意人物？」

早朝、エルに起こされたシュウはアクセルの部屋で今日の演説とパティーについての説明を受けていた。

「まあ、魔鉱石の件で、たいていの反発は抑えられるが、王族関係者、特に伯父上には気を付ける。いろいろ恨まれてるからな」

そう言うと、アクセルは恨まれている原因を推測も交えながら教えてくれた。

アクセルの伯父であり、大公爵の恨みとは、王位継承第一位という立場にありながらずっと王になれないことであった。

先王の兄であり、王太子の立場にも関わらず、父、アクセルの祖父にあたる人との確執から王位を継げず、今回のチャンスもアクセルに奪われた形になっている。

先王は大公爵に殺されたなどの噂話も湧いてくるくらいだから恨みも相当強い。

「ま、まあ、出来るだけ接触しないように気をつけるよ」

まったく関係ないのに一方的に恨まれるのもなんだかな〜などと

考えるシュウだった。

「後は、他国と問題を起こさないでくれたらそれでいい。さりげなく色んな女を嫁にどうかとか？世継ぎもそろそろ考えたら？とか言ってくる奴もいるが、やんわり断つとけ」

「もう、結婚話とかされんの！？」

「そりゃな、お前の世界は晩婚化が進んでいるようだが、こつちじゃ早い奴は12歳で結婚する奴もいるぞ。しかも、相手は45のおっさんらしいぞ」

そんなショッキングな事を言われたシュウは放心状態になっていた。

「おい、大丈夫か？まあ、近寄ってくる女は皆下心を持っている。十分に気を付けることだな。一応エルともう一人を同行させるからうまくやってくれ。」

「エル以外にも従者いたんだ？」

「そりゃな、密偵担当のマチルダと護衛担当のファムナだ。こつちに来るように言ってるんだが、エル、ちゃんと伝えたんだろうな？」

二人がさつきから珍しく静観を保っていたエルの方を振り向くと何か深く考え込んでるようであつむいていた。

エルの返答を待っていると、可愛らしい寝息が聞こえてきた。

「何、お前だけ寝てんだよ！珍しく、静かと思ったら！起きろ、この役立たず！」

寝ているエルの襟を掴んで、ブンブン揺すって怒りを露わにした。

「す、すみません。今日の事を考えたら緊張して寝れませんでした！」

「お前は、遠足前の小学生か！俺だって眠いんだよ！」

「アクセル様、それを言うなら受験前の高校生です。後、睡眠はちゃんと取りましよう」

「俺の寝不足は演説用とパーティーの乾杯用の原稿書きで徹夜したんだよ！お前と一緒にするんじゃないやねえ！注意もすんじゃないやねえ」

二人のいつものやり取りを見て、相変わらずだなあと思いコーヒーを口にするシュウは部屋の隅に見た目20ぐらいの女の人がいるのに気付いた。

「…あ、アクセル、部屋に誰か居るんだけど？」

「はあ？俺達以外はいなうわあああああ！！　ま、マチルダ！お前いつから！？」

「……最初からいました。…ついに主様も気付かないほど影が薄くなっただけですね……」

「いや、寝不足でさ。わ、悪かったよ。」

「いいです。新しい主様は気付いてくれました。……その、嬉しかったです」

気付いてくれた事がそんなに嬉しかったのか頬を染めながらシユウを見つめてくるマチルダにど、どうも、としか返せないシユウだったが、彼女の耳が普通の人より長い事に気付いた。

「君、耳どうしたの？」

「私はハーフエルフですから」

「ああ、マチルダは人とエルフのハーフだからな」

「エルフ!?あの森の奥地でひっそりと暮らしていて、人を毛嫌いするあのエルフ？」

「いつの時代の話だ。今じゃエルフが王の国だってあるし、非常に仲の良い種族だぞ。それにハーフエルフも珍しい種族じゃない」

大昔は蛮族と言われてきた種族も今では普通に同じ民族として生活していて、純血の種族を探すほうが大変になっていて、ドワーフとエルフ以外は純血が存在しなくなっている。

シユウは自分の持つファンタジー知識が全く役に立たない事を思い知らされた。

「だから、種族差別よりも身分による差別の方が問題でな。他国では絶対的な身分制度や奴隷売買などやってる国もあるから色々厄

介なんだよ。」

どの世界でも同じような問題が起こるんだなあとシユウが深くため息をつく。と女の子の声が扉の外から聞こえてきた。

「ご主人さま、お食事運んできましたよ。入りますよ。」

「エル、お前の居眠りで朝食が台無しになっちまったな……」

「ですね……」

二人のそんな会話をよそにメイド服を着た10歳ぐらいの女の子が朝食を台に乗せてやってきた。

「今日のご飯もとっても美味かつ、しそうですよ。」

完全にこの子つまみ食いしてるって思っていると、躓くところもないのに躓き、台が横転し、さっきの二人の会話の意味を深く理解した。

エルはいつもの事のように掃除を始め、女の子は正座でアクセルに叱られていた。

「ファムナ、マチルダがメイド服来てるのは城内での情報収集のためで、護衛担当のお前は着る必要もないし、メイドの真似ごともしなくていいんだよ。分るよな？」

「ファムはメイドがやりたいんです。人を傷つけるのは好きじゃないんです。」

その様子を見ていたシュウに掃除をすばやく終えたエルがファムナの事情について話した。

元々、戦闘能力の高い修羅族の血を受け継いでいたファムナは幼い時から城での厳しい戦闘訓練を受けていたらしいが、訓練中に仲の良かった友達に深い傷を負わせてしまいそのまま友情も壊れてしまったらしい。

人を傷つける事の出来なくなった彼女はクビになり、メイドとして新しい人生を歩むはずだったが、さっきの通りドジを連発。しだいに庇ってくれる人もいなくなり、クビに。

一人で泣きながら歩いていた所にエルが声をかけ、アクセルのメイド兼護衛係としてやとったと言いきさつだった。

今日のシュウの護衛の一人が彼女なのだと説明され、できるだけ争いが無いように努めようと思うシュウだった。

「悪かったよ。俺が言いすぎたから泣くのやめてくれ」

こうしてアクセルが折れるのがいつもの事らしい。

さっきまで沈んでいたファムナもマチルダがなぜか持っていたクッキーを貰ってから機嫌も右肩上がりのおようだった。

最初はアクセルと同じ顔のシュウに戸惑いを見せていたが、事情を飲み込んでからはある程度、慣れたようだった。

朝食もアクセルの非常食で適当に済ませた後、そろそろ演説用の服に着替える時間が迫って来たので、アクセルはシュウに原稿を渡した。

「この内容をきちんと読めば、大丈夫だ。俺の力作だからな。」

この時まで、シュウは完全に忘れていた。この世界の字を読む事が出来ないことを。

急に青ざめたシュウにエルがどうしたのか聞いてきた。

「何か問題でもありましたか？」

「あはは、俺、字読めないや……」

「そういう大事な事は先に言え！ど、ど、どうしよ、エル」

パニックに異常に弱いアクセルをしり目にエルは冷静に対処した。

「言葉は通じるようですので、私が読み上げますのでシュウ様の世界の言葉で書き直してください。まだ、時間はありますから急げば間に合います。」

エルとシュウの翻訳作業も順調に進み、その様子を見て安心したアクセルが突然大声をあげた。

皆がアクセルに注目すると彼は、どうやら重大な事を言い忘れたようだった。

「シュウ、さつき注意事項は伝えたと思うが、最重要危険人物の存在を完全に忘れていた。」

「誰なの…？」

場が緊迫した雰囲気にも包まれた。

「俺の姉でもある第一王女エウレーネだ。いいか、奴と会ったら逃げろ、無視しろ、干渉するな、近寄らせるな、話すな、己を無にするんだ！じゃないと食われるぞ」

「その人そんなにやばいの？」

「ああ、恐ろしい人だよ……ホントにね」

「とりあえず、遭遇しない事を願うよ」

この時、シュウは笑いを堪えているエルには気付かなかった。

「良くお似合いですよ、陛下」

「なんか派手すぎじゃないかな」

シュウは国王専用衣装部屋で演説用の衣装に着替えていた、いやメイド長に強制的に着替えさせられていた。

今から大勢の前で演説すると思うと緊張がぶり返してきたのか、水を軽く含み喉を潤した後、手直したばかりの原稿を読み直したいの内容を頭に入れた。

「そんな緊張しなくてもきつとうまくいきますよ」

エルの言葉も頭に入ってこないほど今のシユウに余裕などなかった。エルがどうしたら緊張がほぐれるか、あれこれ考えていると扉の向こうから二人の男女の声が聞こえてきた。

「ちよつと王女、今陛下はお着替中ですから入るのはダメですって」

「フェーデ、私はアクセルの姉です。絶対に許してくれます」

「姉だとか王女だとかの問題じゃなくて、マナーの問題です。」

「裸にひん剥かれてるアっちゃんなんて想像するだけで興奮するじゃない。フェーデ消え去りなさい」

そのやり取りの後、青年の悲鳴が廊下に木霊した後、扉がゆっくり開かれた。

シユウはいきなりの最重要危険人物襲来に内心びくびくしながら開かれる扉を見つめていると品格のある青のドレスを身に付けた王女の風格たっぷりの凛とした雰囲気漂う女性と目があった。

とても最重要危険人物に見えなかったので、瞬きをすると彼女の姿が見えなくなっていた。

微かな気配を下に感じるとすでに懷に潜り込まれていた。

ドレスを着た状態でこの身のこなしタダ者じゃないと考えながら、腹を裂かれ血だらけになる自分の姿を想像したが、床に押し倒されただけだった。

「アツちゃん、素敵すぎるよ」。いつの間にか大人になって姉さんはうれしいです。」

シウが気付いた時には、自分の頬にすりすりしてくるさっきの風格がどこかに遠くにいつてしまった女性がいた。

最初は慌てて離れようとしていたが、冷静に考えるとこの状況、男冥利に尽きるよなと邪なことを考えていたら逆の頬をエルのヒールで踏まれていた。

「今日は特に派手にやられてんな」。エウレーネ様、エル、これから大事な演説を控える国王に対してあまりに無粋ではありませんかね」

若い騎士が窘めると、二人は離れ、シウはやっと解放されたのだった。

「申し訳ありません、直感で踏んだ方がいいと思ひまして」

「ごめん、ごめん。久しぶりで抑えが利かなかったよ。私としては受け入れてくれるアツちゃんも可愛いけど、いつもみたいに踏みつけて罵ってくれる方が…なんかいいかな」

「エウレーネ様、キャラが早くも崩壊の一途をたどり始めていま

すので急いで修正を」

「あら、アクセル。髪を黒くされたの。白も素敵だけれど黒髪だと男らしさが増しましたわね」

フェーデに注意されたエウレーネはすばやく元の風格を取り戻すのだった。

「どうですか、陛下、久しぶりの表の世界は？」

メイド長が居る手前、正体を明かす事もできず、シユウはアクセルを演じることに決めた。

「な、なかなかのものかな。さつさと終わらせてゆっくり寝たいけどね」

「あはは、表に出てもいつもと変わんねーな」

どうやら誤魔化すことに成功し、ホツとしているとエウレーネがシユウに対して、急に難しい顔をしてメイド長を下げさせた。

「あなた、もしかしてアクセルではないのでは？」

ホツとした束の間の正体発覚にシユウは度肝を抜かれたが、確信があるからメイド長を下げさせたのだからホントの事を告げた。

「すみません、騙すような真似をしてしまって」

「別に責めている訳ではありません。私にとっては弟が二人出来たようなもの。それにシユウちゃんは私の愛情表現を受け入れてく

れるから最高に気分がいいのよ」

この人にとってはお気に入りの服がリバーシブルだったぐらいの事なんだなあと懐が深いのが、馬鹿なのか、懐が深くて馬鹿なのか、色々考えさせられる羽目になった。

「それにしてもそっくりすぎるだろ、俺はてっきり本物かと。エウレーネ様どうして分ったんですか？」

「そんなの決まってるでしょ。匂いよ、少し違っていたから」

「犬ですか、あなたは。」

「ああ、思い出ただけで興奮してきたわ」

一人で盛り上がって来たエウレーネにとりあえず退室していただくため、シュウはアクセルがフェーデとエウレーネを呼んでいたと嘘をついた。

それを聞いたエウレーネはシュウに軽いハグをするとフェーデの襟元を掴んで、そそくさとアクセルの部屋に向かっていった。

「…よかったのでしょうか？」

「いいんじゃない、あながち嘘でもなかったけど罰は与えとかないと」

いつも穏やかなシュウの何か黒い部分を見た気がしたエルだった。

「一つ聞いていいかな？」

「なんでしょうか？」

「怒ってないんだけど、さっきなんで踏んだの？」

アクセルそっくりなシュウが一瞬でもエウレーネを受け入れているのを見て、嫉妬したとは言えなかった彼女は戸惑いながらも

「顔がムカついたからです！」

とだけ答えた。

ちなみに、メイドたちの間で、どこからともなく青年の悲鳴が聞こえたという亡霊騒ぎが起こったらしい。

七話

「あの、少しは元気出してもらえますかね」

「結局、シユウ戻って来なかったよ…」

「メルちゃんも何か食べる？」

サトルとメルシアとアリシアの三人は国王の演説が行われる中民区国立広場に集まっていた。

今日に限っては、デートをしている恋人や買い食いをしている学生、運動をする人、遊んでいる無邪気な子供とそれを見守ってるように親同士会話に華を咲かせているだけなどの普段の公園の風景は見られず、バーリッツ市民が新しい国王を見ようとひしめき合っていた。

商魂溢れる商人たちの屋台では、定番の軽食から無許可で作ったであろうアクセル様グッズが販売され、売り上げは上々のようだった。

もちろん三人も興味に駆られてやって来たのだが、メルシアは乗り気ではなかった。

結局シユウは一日経っても帰ってくる様子はなく、もしかしたら罪人としてこの演説のついでに公開処刑をされるんじゃないかとネガティブな思想が頭の中をぐるぐる回っていたからだ。

「心配しすぎだって、昨日だって貴族が謝罪してきて驚かされたんだし、もっとびっくりするような事して俺達の前にひよっこり現れるさ」

「そしてひよっこり首を切り落とされるんだね……」

「ああもう、シュウはまだ死亡フラグ立ててないから死ぬことはないって！」

ネガティブな思考から離れないメルシアにいい加減イライラしたのか、サトルは言葉を荒げたが、当のメルシアはサトルの態度よりも聞きなれない言葉に引かかった様だった。

「死亡フラグ？」

「ええっと、平たく言うと死んじゃうってことだ。それがないんだからシュウは死なない。わかった？」

「とりあえず、サトルを信じてみるよ。後、お母さん、それを無理やり私に食べさせようとするのやめて。お腹空いてないから。」

アリシアはしきりにあーんと言って、アクセル様クッキーと言うただのクッキーをメルシアに食べさせようとしていたがうまくはいかなかったようだった。

サトルは彼女なりに娘を励まそうとしてるのかと感心していたが、アリシアの表情をよく見ると暇だから娘使って遊んでるだけだという事に気付いた。

「サトル君、私の顔に何か付いてるかしら。そんなに見つめられると照れるわ」

照れている様子は無く、その笑顔の裏に並々ならぬ殺気が込められていたので、サトルはとりあえず、褒めてごまかすことにした。

「い、いや、いつ見ても美人だなあと思ってただけですよ」

「もう、お世辞が上手なんだから」

そう言つと今度はホントに照れた様子で、殺気も消滅していた。

「ほら、メルシア、時間もまだあるし、俺がソフトクリーム買ってやるよ」

「ホントに！やったー。お母さんここで待っててね」

やっと普段の元気を取り戻したのか、ソフトクリーム屋まで走って行ってしまった。

「色々気を遣わせて悪いわね」

「そのくらいしか出来ませんから」

「サトルー！早く行かないと無くなっちゃうよ」

メルシアに催促され、急いで追いかけるサトルだった。

おごつてやると言ったものの、アリシアさんからアルバイト代として貰ったのは、100なんちゃらと書かれた紙幣一枚だけだった。

「なあ、メルシア。俺これしか持ってないんだけど、足りんのか？」

「100フローナもあつたらいっぱい食べ物買えるよ！よかった財布持って来なくて」

「おい、他にも食う気じゃないよな。さっき腹減ってないって言うてたろ」

「走つたら急にお腹空いちゃったんだもん。いっぱい奢ってもらお」

財布扱いには気が引けるが、無邪気なメルシアを見てると妹ができたみたいで、つつい顔が綻び、大学内で、妹萌えくなどと言っている連中の気持ちが少し分ったような気がしたサトルだった。

「で、ソフトクリームは幾らぐらいなんだ？」

「だいたい3フローナぐらいだよ、おじさん二つ頂戴」

「あいよ、お嬢ちゃん、可愛いから一つまけて5フローナでいいよ」

サトルは言われるがままに100フローナ札を出すと10フローナ札9枚と、1フローナ札5枚が返って来た。

通常3フローナが相場のを5フローナで売るとは暴利だと思
っていたが、お祭り騒ぎによる値上がりだろうと解釈し、喜んでい
るメルシアの手前、見過ごすことにした。

しかし、お金に関しての知識はあつたほうがいいと考えたのか、
屋台のオジサンに質問してみた。

「なあ、おっちゃん。俺、遠い国から来て通貨に関して詳しくな
いんだ。教えてくれないかな？」

最初は顔をしかめたオジサンだったが、サトルが密かに5フロ
ーナを握らせると快く教えてくれた。

この国では早くも紙幣を採用しており、金貨、銀貨、銅貨の使用
は減ってきている。

これは金などの消費を削減と運搬の負担を軽減するためだが、紙
幣を採用している国は10カ国ぐらいで世界の10分の一の割合に
なっている。

まだ、世界の通貨は金貨がベターらしく、だいたい金貨一枚一万
フローナ、銀貨一枚

100フローナ、銅貨一枚1フローナとなっていることを教えても
らいアイスの値段から1フローナ100円と認識する事にした。

それから育ちざかりなメルシアに連れ回され、残金が30フローナ
にまで削られていた。

「さすがにアリシアさん待たせっぱなしじゃ可愛そうだろ」

「それもそうか。じゃあ、お母さんの所まで競争だよ。よいどん。」

「こら、走ったら危ないって」

言った束の間、メルシアはこの辺にはあまりいない高価な服装に身を包んだ男とぶつかった。

「ほら、言わんこつちやない」

近寄ってみるとメルシアは貴族風の男に必死で謝っていた。

どうやら彼女の食べていたイカ焼きの様なもののタレが服に付いてしまったようだった。

周りの人間はざわざわとしていて、シュザント帝国の奴だぞ、殺されるんじゃ、などの声がちらほらサトルの耳に届いた。

自分と比べても遜色のないイケメン貴族は切れ長の目で、メルシアを睨むと彼女に手をかけた。

「…いや、こちらこそ悪かった。これで代わりの食べ物でも買ってくれ」

「そ、そ、そ、そんな大金受け取れません。それじゃ失礼します」

彼がメルシアに差し出した物は銀貨三枚。イカ焼き一本の代償に

しては高すぎる。

あまりの金額と貴族という存在を怖がったのかメルシアは走って行ってしまった。

とりあえず、フォローを入れるべくサトルはその男に詫びを入れた、

「うちのメルシアが申し訳ない事をした。それと銀貨三枚じゃ高すぎる。そりゃ逃げられるってものだ」

「…それでか。彼女にはすまない事をした。謝っていたと言ってもらえるか？」

「ああ、お安い御用だ。それじゃ」

その男はシュウの後ろ姿見つめながら狂気の籠った笑みを浮かべていた。

各国の来賓が集まる場所ではこんなやり取りが行われていた。

「殿下、探しましたぞ」

「すまない、少しその辺をぶらぶらしていただけだ」

「ん！その服はいかがされたのですか？」

「少し、ぶつかってな。それよりも収穫があつた。」

「…またですか。いい加減にしないと処罰を受けますよ。隠すのも大変なのですから」

「考えただけで、楽しみで仕方ないよ。まあ、それはいいとして例の件は」

その男は年老いた男に近寄り、ひそひそ声で話しかけた。

「その件に関しましては手はず通りにいつております」

「この国に来てよかった。楽しみが増える一方だ」

「そう言えば、殿下はあまりこの国が好きではなかったのでは？」

「昔の話だ。」

男はそれ以上は言わず、黙って街並みを見回していた。

いよいよ国王の演説の時間が迫って来たこともあり、あたりは今か今かと待ちわびた雰囲気だった。

「メルシア、安心しろ。さっきの奴怒ってないし、すまないって伝言もあるぞ」

「メルちゃん、また誰かとぶつかったの？」

「貴族っぽい奴だったけど、そんなに悪い奴じゃなさそうでしたよ。」

「…でも、あの人シュザント帝国の紋章が付いてた。しかも今日来てるって事は相当身分も高いし、顔見た瞬間に危ない人って雰囲気が出てた」

「そんな風には見えなかったし、見かけで人を判断するのは良くないぞ」

「その人がどんな人かは知らないけどもシュザント帝国自体ではあまり良い噂は聞かないわね。」

シュザント帝国はフルクエンド王国の真東に位置する隣国で、今は国交も開いていおり、経済的な面で協力体制にあり、それによって国力を上げたくにである。

しかし、過去には何度も戦争が行われており、絶対的な身分制度と奴隷制度が存在する国で、フルクエンド王国での人攫い被害もシュザントの犯罪組織らしく、政策面では対立している国である。

そんな治安の悪い危ない国の奴には見えなかったが、何も知らない

い自分が意見するのも気が引けたので、黙っていることにした。

「あーメルも来てたんだ」

そう言っでメルシアに寄ってくる女の子が二人、どちらも将来が楽しみだなあとシユウが思っていると声をかけてきた元気の良さそうな子に指を差された。

「あのにやにやしてる気持ち悪い奴なんなの」

「ああ、今、家に居候してる旅人かな？」

「なんで、疑問形なのよ」

「……ミーシャちゃん、こっち来るよ」

「いや、フウちゃん。別に危ない人ではないから。この人はサトルっていつてまあ、良い人よ」

女の子達のからの評判は微妙なサトルだったが、メルシアの友達のこととも知リたかつたのでメルシアに聞いてみた。

「メルシア、この子たちは？」

「二人は同じ学校の同級生で、ミーシャとフウだよ」

「よろしくね、二人とも。あれ？メルシア学校行つてたの？」

「当たり前でしょ。12歳からは皆学校に通う事になるんだから」

「12歳から？それまではどこで勉強すんの？」

「12歳までは近所の塾で勉強を教えてもらうの」

この国の教育はちゃんと行き届いているようだった。

「二人とも学校は楽しい？」

とりあえず、当たり前障りのない質問を試してみたのだが、

「ガキじゃないんだから、くだらない質問しないで」

「…馬鹿？」

20年生きてきて、こんなに女の子に馬鹿にされた事がなかったサトルは言葉を失ってしまったが、気を取り直して立ち向かう事にした。

「俺ってそんなに気に障る事言っただけかな？」

「べ、別にただ気に入らないだけよ！」

「メルちゃん取った」

どうやら彼女達は今日、メルシアも一緒に良かったのだが、知らない男と一緒に来てしまった事が気に入らなかったのだらうと解釈した。

「俺この国の知り合いっていうとメルシアぐらいだから案内も兼ねて一緒に来てもらったんだ。悪い事しちゃったね」

二人共、自分達が意味なく絡んだことを悪いと思ったのか顔を伏せがちに謝ってくれた。

「俺は素直な子は好きだよ」

さわやかな笑顔で二人の頭を撫でたサトルだったが、

「触らないで、変態」

「…不潔」

どうやら二人には頭ナデナデはNGのようだった。

少しショックだったサトルは話を変えてみることにした。

「そついや、アクセル国王ってどんな人なんだ」

女の子トリオは知らないのか首を横に振るだけだったので、亀の甲より年の功アリシアさんに聞くことにした。

「それが、アクセル様は14年間部屋に閉じこもっていて誰も顔すら知らないんです。だから今日は初お披露目なのでこんなに盛り上がってるんですよ」

「なるほど。14年閉じこもっている奴が国王になっていいのかよ」

そういつた最中、急に音楽隊の演奏が始まりいよいよ国王陛下の登場と言つ事もあり、辺りは熱気に包まれた。

「皆様、大変長らくお待たせしました。第210代フルクエンド王国国王陛下アクセル・プルトス・ザン・フルクエンド様のご登場です」

そのアナウンスの後に大歓声を一身に浴びて現れた青年はサトルの良く知る人物だった。

のんきにサトル達に手を振っていたが、同じくのんきに手を振っていたのはアリシアさんだけで、サトルとメルシアは放心状態になっていた。

八話

放心状態の二人をよそに演説はスムーズに進んでいき魔鉱石の新たな使い道の部分の説明も旨くいたようで、市民からの熱烈な拍手により1時間の演説は終了となった。

特に反発心を大なり小なり抱えていたフルクエンド王国貴族は先を見据えた考えとそれを実行した能力にカリスマ性すら感じていた。

しかし、各国王族の中には顔には出さずとも、苦虫を噛む思いをした連中も少なからずいた。

どの国にもアクセルという男は、14年間外の世界も知らず、政治に参加した経験もないボンクラ王子と言う認識が一般的で、その男が国を継いだとなれば主要三大国家の牙城は崩れたも同然と皮算用をしていた為である。

演説用の特設の高台から飛び降りるとサトル達の所に近寄った。

誰もが思ってもなかった行動にあたりでざわつきが起こり、特に護衛担当のエル顔つきは非常に険しいものに豹変していた。暗殺の可能性がゼロになった訳でもなかったの自分から人ごみに飛び込んだためだ。

さすがに自分の行動の軽率さに気付いたのか、どうしたものかと考えた末にこれも演出の一つだと思わせることにした。

演説中にもアピールした魔鉱石内臓の音声拡張期、マイクみたいなもののスイッチをオンにするとアクセルの台本には書かれていなかった事を声に出した。

「えー、皆さん、国王を下から眺める気分はいかがですか？首を痛めた方もいるんじゃないですか？」

今までの演説をぶち壊しにするような発言に場の空気は一変した。エルも今の失言に顔面蒼白になっていた。

「確かに魔鉱石の生む新たな産業により、国はさらなる発展をし国民はさらに潤うでしょう。しかし、それだけでは何も変わらないんです。なぜだか分りますか？」

「国王、貴族が民衆を導き、それを国民が崇める。その形が壊せないからです。私は5つの約束事を皆さんと結びます」

シュウの公約はこの通りだった。

- 1・貴族議員と同じ数の議員を市民から選出する事
- 2・新たに法律を制定し、法により人を裁き、裁く人間は貴族、市民を問わない事
- 3・貴族学校への一般市民の入学許可
- 4・完全実力主義による役職決め
- 5・主への謁見の権利の自由化とどんな相談ごとでも出来る限り答える

これはほとんど貴族と庶民の垣根を取っ払ったようなものであり、

貴族達の蘇った反発心により、激しいヤジが飛んだ。

「黙れ！早い話實力を示せばいいんだ。もう、身分に胡坐をかく時代は終わったんだ。王が高い所から民衆を眺める時代は終わりを告げたんだ」

いつのまにかヤジを飛ばす者もいなくなっていた。

「こうして同じ高さから見るとただの19歳のガキです。一国を背負うには荷が重すぎます。しかし、国民一人一人が少しずつ荷を運べば、確実に前へ進みます。そして、今日がその一歩目なんです」

広場は一瞬の静寂の後、さっきの何倍もの拍手が起こった。

拍手が鳴りやまない間にシュウはサトル達に残るように言う、皆の声援に応えながら退場していった。

エルの姿が見えるとシュウは絶対怒られると思ったので先に謝った。

「エル、勝手な事してごめんなさい。怒ってるよね……」

「最初は長ーいお説教をしようと思いましたが、素晴らしい演説でした。」

エルに怒られるどころか褒められたのでシュウは安堵のため息をついた。

広場から人がほとんどいなくなるとエルにサトル達を呼んでもらい、今は人気のない宮殿内で、一日ぶりの再会を果たしたシュウだった。

「お前、ホントにシュウなのか？」

サトルは1時間前から尋ねたい質問をぶつけた。どうやらメルシア、アリシアも同様の疑問を抱えていたようだった。

「なりゆきで表向きの国王になっちゃてね」

「驚かされることには慣れてると自負していたが、今日ほどびっくりした事は無かったよ」

シュウは影武者の経緯について話すとサトルに呆れられた。

「相変わらずすぎんだろ。まあ、それでこそシュウって感じだが。つーことは14年間部屋に閉じこもってる本物は記録更新中って訳なんだな」

「そうなるかな、それはそうとサトルには俺の護衛として一緒にいてもらいたいんだ」

「ああ、いいよ。まあ、そんなに日本にいた時とやる事変わんない気がするが」

「一瞬、遠い存在に感じちゃったけど、シュウ君はシュウ君なのね」

「メルシアとアリシアさんならいつ来ても歓迎しますよ」

三人が和気あいあいと話しているさなか、メルシアだけは一人怒りを覚えていた。

シュウを心配して、帰ってくるのをずっと待っていたのに再び会った時には、なりゆきとはいえ自分のトラウマである貴族の上の王族になっていた。

ドーセ王の権利が与えられるからはいはい安請け合いしたのだからと黒い感情がだけが心の中で活発に動いていた。

「王になったとたん神様気取りなんて良い御身分だね、俺の騎士になれよだって、権力者は簡単でいいね」

「いや、俺はそんなつもりじゃ…」

予想もしてなかったメルシアの反発にショックを受け、動揺を隠しきれなくなったシュウにサトルがフォローを入れた。

「メルシア、落ちつけよ。シュウは市民と貴族の垣根を壊そうとしてんだぜ、さっき聞いてただろ？」

「そんなこと口から出まかせだよ。それにサトルだってシュウの騎士に出世して嬉しいんですよ」

「メルシア…」

「う、うるさい！お前らなんて敵だ。」

彼女自身こんなひどいこと言うつもりもなければ、言いたくもなかったが一度爆発した負の感情を抑えきれなくなっていた。

「メルシア、いくらなんでも言いすぎよ。二人が何したっていうの！謝りなさい！」

「…お母さんまで私を責めるんだね。信じてたのに、どんな時でも味方で居てくれると思ったのに…みんな大嫌い、みんなみんな死んじやえばいいんだ！」

さっきまでメルシアの友達の話し相手になっていたエルも何事かそこっちを見ていた。

「ミーシャ、フウ、さっさと出ていこ！」

「ど。どうしたの！」

「…泣いてる」

泣きながら二人を呼んだメルシアは二人を連れてどこかに行ってしまった。

すぐさま追いかけようとしたサトルにアリシアがストップをかけた。

「今は何を言っても聞く状態じゃないわ。ここは二人に任せましょ。昔からのお友達だし、メルちゃんの心の支えになってくれるはずよ」

そう言っているアリシアの表情も心の支えになる事ができなかった。自責の念が込められていた。

サトルからメルシアの過去を聞かされたシュウは自分を責める事ができなかった。

この光景を遠くから眺めている大公爵の姿には誰も気付く者はいなかった。

「はあ……」

あれから時間も経過し、今はパーティーが始まっていがメルシアの一件が頭から離れずさつきから深いため息をつきっぱなしだった。

目の前には最高級の食材を宮殿屈指のシェフが調理した料理が並べられており、貴族達が舌鼓を打っていたが、シュウは粗相の連発だった。

パーティーの乾杯を済ましてから十分も経っていなかったが、シュウがグラスの中身をこぼす事3回、スプーンで肉を刺そうとした回数5回、エルとファムナを間違える事10回におよび、見られなくなったエルはついに声をかけた。

「アクセル様？」

「大丈夫、大丈夫、フォークとナイフの使い方は知ってるから」

心ここにあらずな返答だった。

「さっきの出来事で集中出来ないのは分りますが、ここは自国、他国のトップクラスが居る場所です。しっかりして下さい」

普段なかなか口にする事のない料理の数々に無限の胃袋を持つファミナが吸いこんでいたのだが、気になったのか声をかけてきた。

「ご主人様、喧嘩したの？」

「コラ、ファミナ！」

エルがシュウの傷を掘り返す発言をしたファミナを叱ったが、シュウは質問に答えた。

「…そうなんだ。正直、人と喧嘩するのって初めてなんだよね。だからどうしたらいいのか分ないんだ」

「難しく考えすぎなの。喧嘩したら謝って、謝って許してくれたら一緒に遊べばいいの。そしたら分ってくれるの」

ファミナの単純な言葉でもシュウにはとても心地よく聞こえた。

「……そんな簡単なことなんだ。ちゃんと謝ればいつか許してくれるんだ。…あんまりウジウジはできないね。挨拶周りに行かない

と。行こ、二人とも」

シュウが元気を出してくれた事は嬉しかったが、自分が慰めの言葉をあれこれ考えていただけに、ファムナの言葉で立ち直ったことが、少しだけ悔しかったエルだった。

各国の挨拶周りと言っても先ほどの公約に反対があっても魔鉱石の件があり機嫌を損ねれば、時代に取り残されるということもあり、ご機嫌取りがほとんどで、連れてきた自慢の美女との縁談を何とか進展させようという動きしかなく、ことごとくエルに撃墜されていた。

しかし、美人ばかりなのでシュウとしてもそこまでしなくてもと残念がる場面もあり、

「陛下、あまり鼻の下を伸ばしていると引きちぎりますよ」

エルから物騒なことを言われる始末であった。

「主要三大国家のドルゴアとパーシアスも周りましたから、後は隣国だけです」

隣国と言っても大陸の北西に位置し、西部と北部が海に面しているフルクエンド王国にとって隣国とは東部に位置するシュザント帝国と南部に位置する最大の同盟国ファルファーノ王国の二カ国だけであった。

シュザント帝国の集団には女性は含まれておらず、縁談の持ち込みはこの場ではなさそうだった。

「陛下、お初にお見えになります。私、シュザント帝国第二王子のトニ・アレサンドロ・ヴェノム・シュザントと申します。今日は国王の名代として参上いたしました」

「これは初めまして。こんな私ですが、隣国同士協力しあって行きましょう。」

「…協力ですか。そちらの態度しだいだと申しておきましようか」

これを聞いていた周りの人間はギョツとした。ご機嫌を取るところか反抗的な態度にでたためである。

「態度ですか…… 具体的には？」

「そうですね、魔鉱石の加工技術を帝国に明け渡し、公約したことを即刻辞める事と言っておきましようか」

その誰が見ても割に合わない条件に場が鎮まった。

「明け渡すとなるとそちらの国に私が亡命する事になってしまいますよ。それに言ってしまったもの取りやめたりすれば、国民にボコボコにされますよ」

シュウもなんとか冗談めかして返したが、シュザント王子も引かなかった。

「……亡命しろと言えば、してくれますか？」

「…そうですね、美人が多ければするかもしれませんね」

「これは困った。美人が少ないので、あきらめることにしますかね」

シュザント側もこれ以上は危険と判断したのか冗談で返し、引くことにしたようだった。

シュウがこれだけの舌戦ができたのには実は秘密があったのだ。

この声の正体は実はアクセルなのだ。

アクセルが徹夜で発明したトランシーバーのようなバツジがシュウの服の襟元についており、これは各国の揺さぶりを警戒したアクセルの作戦なのだが、功を奏したようだった。

最初はどこからともなく聞こえるアクセルの声を幻聴と思っていたが窮地を救ってくれたそっくりな容姿を持つ友に感謝を述べた。

「助かったよ、アクセル」

（それにしてもしつこい奴だったな。後は同盟国ぐらいたし俺疲れたから寝るわ）

さすがにかなり神経を使ったのか疲れたと言って通信をオフにし

たようだった。

奥の方でざわつきが起これとゆっくりと開かれる扉からついに現れてしまった。

齡60を超えてなお、貫禄のある風貌と王族らしからぬ筋骨隆々の肉体、そして王宮において絶対的な影響力を持ち、アクセルが14年間部屋に閉じこもった原因を作った因縁の男要注意人物である大公爵が。

九話

（どこの拳王様！）

シュウの第一印象は闘気を飛ばせるおっさんそのものだった。

「久しいな、アクセル」

「お、お久しぶりです。伯父上」

アクセルの伯父にあたる本名エリオット・クリュセンデウス・ザン・フルクエンド大公爵と対面し、今まで感じた事のない迫力に圧倒されそうになるシュウだったが、なんとか堪える事が出来た。

「部屋に籠りっきりと聞いてたので心配していたが、今日の演説を聞いて取り越し苦労だったようだ」

「心配をお掛けしまして申し訳ありません。これからは誠心誠意国の為に尽くします」

さっきまで他国との交流を深めようとしていたフルクエンド貴族や他国のトップクラスも確執があると噂されている二人のやり取りが気になるようでちらちら視線を向けていた。

「魔鉱石に関しては見事だと言っておくが、例の公約に関してはまだ国を理解してないように思えるな」

「……それは民衆の立場向上に反対という事ですか」

力強い目に落胆の色を残したエリオットはシュウに近ずくと耳元でこう囁いた。

「王様ごつこのつもりなら辞めた方が身のためだぞ」

そういうと、足早に会場の外に出て行ってしまった。

その後ろ姿を見続けるしかできなかったシュウにすぐにエルが訪ねてきた。

「何を言われのですか？」

「王様は辞めた方が良いんじゃないかって」

「所詮、戯言です。お気になさらないでください」

暗い雰囲気になってきた時、シュウの背中に何かがぶつかる衝撃を感じ、バランスを崩しそうになった。

その正体を見ようと後ろを振り向くとどこぞのブラコン王女様だった。

「エ、エウレーネ様、こんな大衆の面前ではしたないまねはよししてください!」

「ストレス解消にはこれが一番なの!」

「ここではダメです!」

「チッ！」

フェーデの手によりシュウから引き離されたエウレーネは不機嫌そうに舌打ちした。

普段、穏やかな彼女のご機嫌が斜めなのは、このパーティーで難攻不落の美姫と言われる彼女を妻にしようと求婚者が殺到し、シュウの側に行けなかったためだった

正直、抱きついてくる事に対しては歓迎なのだが、エルの一方的な暴力を受ける為、アクセルの部屋に封印しておきたかったが泣き事を言ってもしょうがないので、正論で責めることにした。

「姉上、まだ、ファルファアーノ王国の挨拶が済んでいないので、今は構ってる場合じゃないんです」

シュウに諭され頂垂れるエウレーネだったが、ファルファアーノ王国という単語に引っかけたのかジト目で睨んできた。

「……ファルファアーノ。む、天敵の匂い！」

なんらかのセンサーに引っかけたのか、彼女なりの警戒態勢を取っているのかエウレーネは辺りをキョロキョロしていた。

「これはエウレーネ義姉様。相変わらずのご様子で安心しましたわ」

後ろの方から女性の声がするとシュウと同年代の女の人が、両手を腰に当てていて勝ち誇った表情をしていた。

「これはエレオノーラ王女、お久しぶりですね。でも、貴方にお義姉様と言われる由縁は一生無いから呼ばないでくださいませ。反吐がでますわ」

シユウは上品な物言いだが、もはやトゲしかエウレーネとエレオノーラの間に激しい火花が散っているように見えた。

「私が、アクセルの許嫁になったのは15年も前からですわ。あ、ごめんなさい、その単細胞では忘れてしまったようでしたわね」

「15年前の話なんて無効です！時効です！この泥棒猫」

「盗んだつもりはありません。あまり弟に執着なさると行き遅れが取り返し付かないことになりますよ」

シユウは泥棒猫、もはや死語にもなりつつあるこの言葉を異世界で聞くことになるとはと考えていると、ゾクツとする寒気を感じた。

フェーデはガタガタ震え、エルは護衛としてはあるまじきシユウを盾にし、ファムナはテーブルの下に潜りこんでしまった。

そんな異常な光景にエレオノーラも恐怖を感じたのか後ずさりしていたところ、暗黒のオーラを身に纏った王女がたくさんの男たちを魅了した天使の笑顔と称される微笑みを向けていたが、もちろん目は笑って無い。

「行き遅れなんて私まだ25歳よ。何か問題があるかしら」

パーティー会場の一角は魔窟になっていた。

シュウはエルにひそひそ声でこんな状況になった理由を聞くと小さな声で答えた。

この世界では、全体の平均の結婚適齢期が20歳となっており、貴族にもなると政略なども絡みもつと早く結婚することとなり、25は行き遅れの部類に入る年齢になる。

エウレーネ自身には縁談は今でも大量にあるらしいのだが、アクセル以外に嫁に行く気はないらしくなかなか結婚してくれないアクセルに対する不満が行き遅れという単語により目覚めるらしく、口を滑らせたとある騎士が全治3カ月のけがを負って以来タブーになっているとの事。

（エル、もしかして血の繋がってない俺を生贄にしようなんて思っていないよね）

（そ、そ、そんなことございませんよ？）

（思ってたんだ…）

エルとの小声のやり取りの間に、エレオノーラは恐怖で腰が抜けたのか床にへたり込み、付き人が倒れそうになっている彼女を支えている形になっていた。

シュウは冷静に考えるとアクセルに対する不満という単語が気になり、まさかこの怒り全部自分に降りかかるんじゃないかと思っているとエウレーネの視線はシュウの方向に向かった。

何も言わず、ただただシュウを見つめるので更なる恐怖を周りにもシュウにも与えていた。

シュウはこの窮地を脱出するべく禁断の手を使った。

「フェーデ姉上は気分が優れないようなので、部屋に連れて行ってくれ」

早い話、フェーデを犠牲にすることだった。

急な命令にびっくりするフェーデだが、大衆の目もあり、国王の命令に背くことも出来ず、ものすごい嫌そうな表情で、エウレーネをお姫様だっこすると会場を後にした。

シユウ達はある騎士でもある男の勇士に敬意を払い、両手を合わせたのだった。

恐怖の時間が終わるとエレオノーラはさっきまでの威勢を取り戻していた。

「だいたいアクセル！あなたもあなたです！最初に来てくれるかと思えば一番最後に後回し。14年もあの女に監禁されるわ、情けないですわ」

エレオノーラは綺麗な金色の髪のパニーテールをブンブン振り回しながら、シユウに怒りを爆発された。

「お、俺？」

いきなりの怒声に声を上ずらせ、後ずさったシユウの前にエルが立ち上がった。

「監禁ではなく、複雑な事情がかさなったのです。決してエレオノーラ様を避けていた訳ではありません」

「本当ですか？」

否定以外の答えを出すと殺されそうな眼差しだった。

「そうそう、魔鉱石関連に没頭していたというか……」

「まあ！わたしよりあんな石の方が大事だと？」

シュウのいい訳は見事に失敗し、火に油を注ぐ形になった。

「い、いや、違うんだ！えーと、あの……」

「私が大事だとは言ってくれないのですね」

「だ、大事だよ。えーと、でもねあんな石って言うけどこれから皆の生活が劇的に変化するまさに魔法の石なんだよ、魔鉱石って」

混乱したシュウは彼女のリョーではなく魔鉱石のリョーをしてみたい、エルに「墓穴掘ってますよ、シュウ様」と耳元で囁かれる始末だった。

エルがシュウの耳元で囁いているのをなぜ勘違いしたようで、エレオノーラの声のトーンは弱り切ってしまった。

「……まだ、エルが側にいるのは仕事だけの関係と思ってましたが、そういう事だったんですね……」

そういう事の意味が分らないシュウはあたふたと慌てていたが、ふと彼女を見ると強気そうな眼は潤み、涙を流していた。

「と、とりあえず、涙を拭いて、ほら」

シュウがハンカチを取り出し、涙を拭おうとしたがエレオノーラの細腕に弾かれた。

「今更、私に優しくしないでください！もうこんなとこ居たくない」

「エレオノーラ様！」

これ以上惨めな思いをしなくなかったエレオノーラは走って会場の外に出て行ってしまった。

「陛下、どうか王女様を追いかけては貰えないでしょうか？今日のこの日を非常に楽しみにしていた様でして」

どうしたらいいのかわからないシュウにエレオノーラの付き人が進言した。

「エル、ちょっと言ってくるからこの場はまかせた」

そういつて走り去っていくシュウをしり目にこのざわついた会場をどう落착かせようか骨が折れる思いのエルだった。

エレオノーラとシュウの距離は追いかけるのが早かったこともあり、距離は100メートル程度とすぐに追いつく距離にあった。

「待つて！話を聞いてくれ！」

「追いかけてこないで！」

エレオノーラは自分のぐしゃぐしゃな顔を見られなくなかったのか、走る速度を上げるとドレスを着ている状態にも関わらず、足が速かったのかシュウは情けない事に見事に撒かれてしまった。

「はあはあ、普通に逃げられてしまった…」

少し自分の足を呪ったシュウだった。

「どうかされましたか？」

自信喪失中のシュウに話しかけてきたのはシュザント帝国の王子であるトニだった。

「少し、逃げられてしまいました。貴方こそどうしたんですか？」

「お手洗いに行くだけです。それにしてもいきなり女性を泣かせるとは罪な人ですね」

「まあ、どうして泣かれたかはよく分らないんですが」

そんな会話をしている二人の前に警備中の兵士が通った。

「ねえ、君、赤いドレスを着た女の人を見なかった？」

「は、はい。確かものすごいスピードで庭園の方に向かっていましたが」

いきなり国王に話しかけられた兵士はとても驚いた様子だったが、聞かれた質問に的確に答えた。

「中庭だね、助かった。それでは王子、これで失礼します」

「上手く行く事を願っていますよ」

走り去っていくシユウを見送るとトニはトイレとは逆方向に歩みを進めた。

庭園を探すと赤いドレスが目立った事もあり、隅っこの方にポツンとしゃがみこんでいる探し人を見つけるのに時間は掛からなかった。

「そんな格好だと風邪引くよ」

季節も春先とあつて夜にもなればひんやりと冷たく感じ、ドレスだけでは寒そうと感じたのかシユウは自分の上着を被せた。

「か、格好つけないで。私に走り負けたくせに」

エレオノーラは照れ隠しなのか、シユウの真新しい心の傷に塩を塗り付けた。

「うつ、それは言わないでよ…」

女の子に走り負けたのがショックだったので、シユウはうつむいてしまった。

「相変わらず、かけっこは苦手なのね。後ろ振り向いたら、アクセルいなかったから一瞬見捨てられたかと思ったわ」

「二度とそうならないよう鍛えておきます」

「そこは二度と泣かせて逃げさしたりしないって言うてもらいたいものね」

さっきまで泣いていたというのに一枚も二枚も上手なエレオノーラだった。

「エレオノーラ、さっき付き人さんに聞いたんだ。今日会う事ですごく楽しみにしていたって。どうしてか聞いていいかな？」

「ノーラ、昔みたいにノーラと呼んで。そうじゃないと教えてあげない」

「ノ、ノーラ」

満足したのかノーラは理由を話した。

「貴方は覚えてないでしょうけど、昔、約束したんだよ。国王になつたら結婚しようって。冷静に考えたらいつ国王になるかわらないし、もしかしたらなれないかも知れないんだから、きちんとしたプロポーズではなかったけど凄くうれしかった。」

本人じゃないから当然覚えている訳がないのだが、シュウは罪悪感を感じていた。

彼女がアクセルと思って話している男は偽物だったからだ。

「今日はいろいろごめん」

「謝ってるけど、どうして私が泣いたのか分ってないんですよ」

「……実はそうです」

ノーラはやっぱりといった感じで盛大にため息をついた

「鈍いうえに嘘も付けないなんて」

「鈍いかどうかは定かじゃないけど、これ以上君に嘘はつきたくないんだ」

「ということは、今すごい嘘をついてんのね。それは私に言えない事なの」

ノーラの鋭い指摘にシュウは自分の失言に気付き、言葉を詰まらせてしまった。

「やっぱり、エルなのね…」

「いや、エルは関係ないよ。僕自身の問題だから」

「じゃあ、エルとは付きあってないの!？」

「付きあってないし、好きでもないと思う…」

本人じゃないのではっきりした事が言えないだけなのだが、ノーラはシュウの言い淀みを勘違いしたようだ。

「はっきり言えないじゃない」

「これには深い訳があるんだけど。でも、今は言えないけど折をみて真実を話すよ」

「…そう。じゃあ、その時を楽しみにしてるわ」

「たぶん、君は酷く傷つくと思う。けど、これだけは言える。君を絶対に一人にしないし、誰よりも大事にするから！」

「そ、その言葉覚えておくわ。もし、嘘だったら剣で串刺しにするからね！」

シュウの言いたい事は真実を知った彼女の心のケアに関して全力を尽くしますというもののだが、表現が大袈裟すぎてノーラには完全に新たなプロポーズと認識されていた。

そのため、ノーラの顔は真っ赤だったのだがシュウは全く気付いていなかった。

それから三十分近く、二人は肩を寄せ合いながら何も語らずに庭園の草花を見ていたが、あまりみんなを待たせても心配されると思ったシュウは戻ることを提案した。

「じゃあ、皆の所に帰ろう」

「こんな顔じゃ皆の所にはいけないよ。もう少し落ち着いたら戻るから先に行つて」

「でも…」

「泣きじゃくつたせいで、目も腫れていて化粧も落ちてるから、特に貴方には見られたくないの。お願い…」

「わかった。先に戻つてるよ」

さすがに一人にするのは不安だったので、庭園に配備されていた兵士にノーラの警護を頼むとシュウは一人で宮殿の中に入つて行った。

十話

シユウとメルシアの喧嘩の後、ミーシャとフウは行きつけのカフェにて泣き続けているメルシアを慰めていた。

「落ち着いた？」

「…うん、ごめんね。」

「…ケーキおいしい」

フウに関しては本日八個目のケーキにご執心だった。

「あの新しい国王になんか酷い事言われたんでしょ？」

「ちがうよ。私が一方的な怒りをぶつけちゃっただけ。あの人は悪くないよ」

「…ケーキ美味しい」

「でも、意外だったな。お母さん大好きなメルがアリシアさんとも喧嘩するなんて」

「喧嘩のレベルじゃないよ。悪いのは私。それは分ってるけど、あんな酷い事言っちゃたから家に帰りにくいな」

「…ケーキうまうま」

「…じゃあ、今日は家に泊まりなよ。親はどうせ仕事で帰って来ないから自由に遊べるよ。フウもいいよね？」

「…ケー」「あんたさつきからケーキの感想しかしてないじゃない！少しはメルを元氣付けるようにしなさいよね！」

フウのケーキの感想にいい加減イライラしていたミーシャは怒りを爆発させた。

「うう…」

「ちよつとあんたまで泣かないでよ。ごめん、言いすぎたって」

「…冗談だよ」

「ああー！腹立つー！冷静に考えたら泣くような奴じゃなかったのにー！」

二人のやり取りを見て、メルシアは久しぶりの笑顔をのぞかせた。

「…やっと笑った」

「フウ、もしかしてメルを笑わせる為にボケ倒してたの」

「………そんなつもりじゃない」

「なんだ、あんたなりにちゃんと考えてたのね。良い子、良い子」

「…髪くしゃくしゃしないで。」

「でも、ミーシャ、今日何して遊ぶの？」

「今日はメルの気分転換も兼ねて、フォール街の方に行ってみようか。適当に男見つけて、たくさん奢らせよ」

背伸びをしたい年頃なのか、ミーシャは普段行かない若者のたまり場でもある歓楽街に行く事を提案した。

「でも、危ないんじゃない？」

「…自分が行きたいだけでは」

「た、確かにそれもあるけど、普段やんない事した方が気も晴れるってもんよ」

ミーシャのいつものごり押しにより結局、フォール街に向かう事になった三人だった。

夕暮れ時のフォール街では、少しずつ賑わいを見せ始めるが、治安も悪くなり始める時間帯でもあった。このフォール街にも警備隊が配備されたいるが、ほとんどの兵士はこの街に住みついている犯罪者による賄賂によりコントロールされている。

そのため、治安の良いバーリッツの唯一の汚点でもあるが、ここの生みだす金の魅力に事実上黙認と言う事になっていた。

世間から弾かれた、または自ら壁を作った人々や興味本位で足を踏み入れる若者のたまり場でもあるフォール街の若者に人気の酒場に興味に駆られやってきた三人の少女もいた。

「ミーシャ、お酒は飲まない方がいいんじゃない？」

「ここにきて飲まない方がおかしいって。それに飲めない年齢でもないでしょ」

フルクエンド王国の法律では15歳から飲酒は可能であり、他国では12歳や年齢制限なしなどいい加減な国も存在している。

学校の知り合いですでに飲酒している人も存在しており、飲まない人間の方が少数派になっていた。

その少数派に含まれるメルシアはアルコールという物に対する興味ともう少し大人になってからという母との約束の狭間で揺れている状態だった。

「それはそうだけど…」

「おじさん、何か飲みやすいお酒を三杯ちょうだい」

ミーシャ自身も初めてなのだが、未知なる体験に対する興味と興奮に支配されていた。

厳つい顔をした店主は特に年齢の確認もする事もなく、女の子に好評の度数の抑えられた飲みやすいお酒を作ると三人に差し出した。

ミーシャは三人分の代金を払い終わるとカウンター席に座り、乾杯すると一気に飲み干した。

「ほら、あんた達もさっさと飲みなさいよ。ジュース見たいだから」

ミーシャに促されるままグラスを口にする二人は、今まで持っていたお酒のイメージとは違い、ホントにジュースのような飲み口に驚いた。

「ホントだ。ちょっと、おいしいかも」

「…おいしい」

「ほらほら、今日の事は忘れて楽しも！」

今まで、抱えていた抵抗感が外れると二杯目、三杯目とペースを上げて飲む三人にこの近辺をふらふらしているいかにもチンピラといった感じの男三人に話しかけられた。

「やあ、君達良い飲みっぷりだね。よかつたら俺達と飲まない？もちろん奢るからさ」

「何、ナンパ？まあ、いいわ。結構カッコいいし。」

酔っていたこともあり、三人は男達が互いに目配せしていた事には気付かなかった。

それから、一時間経った後には、お互い酔いのせいもあつたが打ち解けだし、盛り上がるようになっていた。

「へえ、それで落ち込んだから初めてここにきたんだ」

「そうだよ。」

「じゃあさ、俺の知り合いの店で飲み直さない。面白いものが見られるよ」

普通ならいきなり知り合った男にほいほいついてく真似はしない三人だが、警戒心をすでになくしたせいもあって、男の提案に乗る事にした。

店から出て、歩く事10すると人の賑わう所から離れ、さびれた場所に来ていた。

「知り合いの店ってこの辺にあるの？」

どう考えても店があるような場所でなかったことから疑問に思ったミーシャが尋ねたが、帰ってきた答えは予想外のものだった。

「んなもんあるわけないだろ。そんな事言って、分かって付いてきたんだろ」

「はあ、何の事よ！」

「奢ってやったんだし、やる事やらせてもらうってことだよ！」

三人は急に態度の変わった男達に恐怖を感じ、逃げようとしたが思うように走ることはできず、すぐに捕まってしまった。

「おとなしくしろ！」

三人は恐怖で声を出す事ができず震えていて目を瞑っていると、男の呻き声と誰かが倒れる音が聞こえた。

目を開けると、髭面の体格のいい男が一人立っていた。

「ガキの遊びは終わりだ。大事な商品に何、手出してんだ。」

「嬢ちゃん達、フォール街には俺みたいなお人攫いがいるから来なかった方がよかったのにな」

そういつた瞬間、メルシアが体の全体重をかけて体当たりし、足を掬われた男は顔を地面に叩きつけた。

「二人とも逃げよ！」

三人は狭い路地裏を走って逃げた。

五分ほど逃げると追手の気配もなくなり、この通りを抜ければ大通りに辿り着く事が分り安心した束の間、目の前に顔にあざがあり怒りを滲ませているさっきの男が現れた。

「逃げ切れると思ったか。この辺の地理は俺の方が詳しいんだよ」

その男は、一番近くにいたメルシアを乱暴に掴み、後方からこの男の仲間と思われる人影が現れた。

「逃げて！」

フウとミーシャは一瞬躊躇したものの助けを呼ぶ人間がいないと

全員が助かる道がないと気付いたミーシャがフウの手を引っ張った。

「お前ら、二人を捕まえろ！」

ミーシャとフウは後ろから聞こえる男達の足音に恐怖を感じつつも大通りに出ることに成功し、人ごみに紛れることで危機を脱した。

「…どうしょ」

「誰か助けを呼ばないと……ここからならアリシアさんのやってるお店が近いからそこに行こ！」

二人は呼吸も整えないまま、アリシアの店に向かって行つた。

「すまん、逃げられちまつた」

「ガキ相手に何やってる！まあいい、一人は捕まえたからな」

「それにしてもボスも人使い荒いぜ。何人攫えばいいんだよ」

「俺達が自由に商売出来るのはボスのおかげだ。愚痴なんか零すんじゃない。それに、こいつで十人目だ。」

口調からこの中でも下っ端と思われる男が発言した。

「あの…実はボスから連絡がありまして、合流することになったるんですが」

「ボスから連絡？」

「はい、手紙が届いていたので」

「ばかやろ！そういう大事なことは早く言え！」

「す、すみません！」

「今から手紙に書いてる場所に合流するぞ」

そういつとその男は眠らせたメルシアを馬車の荷台に積んだのだ。
った。

サトルは今日もアリシアの店で働いていた。待っていててもメルシアが帰ってくる様子はなく、一人で家にいるのも気まずかったためなのだが、昼間の事が気になってミスを連発していた。

「サトル君、少し休憩してきたら？」

体力的にはまったく疲れていなかったが、アリシアの気使いを受けけることにした。

「はい、休憩もらいます」

サトルが休憩を取ろうとすると店にミーシャとフウが勢いよく入ってきた。

サトルは突然の来訪者に驚いたが、二人の泣きじゃくっている表情を見てさらに驚いた。

「ふ、二人とも、どうしたの？メルちゃん是一緒じゃないの」

アリシアが珍しく動揺しながらも、二人に何があつたのかを聞き出そうとしたが、二人共さらに泣きだしてしまった。

とりあえず、二人を奥の部屋に連れていくとサトルとアリシアで話を聞くことになったのだが、泣きやんだ二人の話を聞いて、アリシアは言葉を失ってしまった。

「アリシアさん！しっかりして下さい」

「こんな事聞かされてしつかりなんてできないわよ！」

サトルの言葉に声を荒げたアリシアは大声を出したことにより冷静になった。

「怒ってる場合じゃなかったわね。」

「とりあえず、俺はガルガードを連れてフオール街つて所でメルシアを探しに行つてきますから貴方はシュウに助けを求めて下さい。必ず、力になってくれますから」

「分つたわ。ミーシャちゃんとフウちゃんはここに居なさい。いいわね？」

二人は肯くと、サトルはガルガードを連れていくためにアリシアの家に向かうのだった。

夜のフォール街では一人と一匹が落胆しながら歩いていた。かれこれ一時間程度。

「俺はお前の機動力と嗅覚頼ったのに、何でこの一大事に役に立たないんだよ！」

サトルはガルガードならメルシアの匂いで探索可能と踏んでいたのだが、肝心のガルガードは花粉症にかかっていた。

「ぐうう」

ガルガード自身も飼い主のピンチを救うことができず、反省しきりだった。

「つーか、何で異世界に花粉症なんてあるんだよ！鼻詰まった犬なんてコピーできないOLぐらい使えねえよ！」

「がうがう」

ガルガードの吠えた方を見ると、路地裏にこの辺には居るはずのない貴族風の男とその部下の様な連中が何かを話し合っていた。

「人攫いの件だが…」

「部下にうまくやらせましたので…」

「そうか、では合流地点に向かう」

サトルは貴族風の男に見覚えがあった。それは、演説のあった広場でメルシアとぶつかった男だったからだ。

人攫いの件という単語で、メルシアを攫った連中と何か関係があると思ったサトルは尾行することにした。

「ガルガード、お前はシュウ達を連れてくるようにしてくれ。この場所からの尾行ルートは印を付けとくから頼んだぞ」

一人ではメルシアを見つけても難しいと考え、ガルガードを有効利用するべく、最善の策を考えた結果だった。

十一話

エレオノーラとの関係も何とか修復されたが、あれだけの騒ぎを見られていたので、会場に再び入るかどうか扉の前で悩んでいるシユウは後ろから誰かに呼ばれている気がして振り向くと、エルとフアムナがいた。

「アクセル様、どこに行っていたのですか!？」

「庭園にいたけど。ああ、ノーラとは仲直りできたよ」

自分の事を心配して探してくれていると思ったのだが、どうやら違うようだった。

「そんなことどうだっていいんです。それよりも緊急事態です。」

結構苦勞した事をそんなこと呼ばわりされ少しショックだったが緊急事態と言われ、顔を引き締めた。

「何かあったの?」

「さっき、アリシア様が訪ねられたのですが、メルシア様が人攫いを生業にする組織さらわれたようです。」

予想していなかった事態にシユウは衝撃を受けたが、アリシアに会って事態の把握に努めることにした。

アリシアの居る部屋に入ると、彼女は実の娘の危機という事もあり平常心でいられないと言った感じだった。

シウはアリシアから詳細を聞き、急いで助けに行く事を決めたが、エルに反対されたしまった。

「国王自ら危険をさらすのを黙って見過ごすわけにはいきません！」

「メルシアがこうなった原因は俺にも責任があるし、彼女は这个世界で最初にあつた人だ。助けに行きたいんだ」

「しかし…」

「護衛のくせに僕を守り切る自信はないのかい？」

以外に単純なエルはシウの挑発的な言葉に簡単に乗るのだった。

「私とファムナで守れないものではありません。分りました。少数精鋭で行きましょう」

「ああ、兵を集めている時間もないしな。で、フォール街つてどのくらい掛かりそう？」

「犬車をかなり飛ばせば、30分程で着くかと」

危険なのでアリシアを待機させると、犬車置き場まで行く事になったのだが、その姿をノーラに見られていた事に気付かなかった。

犬車のトップスピードはシュウの思っていた以上の速さだったことと揺れの激しさから軽い乗り物酔いを引き起こしていた。御者のおじさんが優秀なのか知らないが、時速120キロのスピードで市街地を滑走していた。

「気持ち悪い…」

「全く情けないですわね」

あまりの気分の悪さにノーラの幻聴まで聞こえてきたよと思っていたシュウだったが、御者席からひょっこり顔を出したノーラに固まってしまった。

「な、なんでノーラが乗っているのさ！」

「あんなプロポーズの言葉を言ったのにも関わらず、いきなりエルともう一人女の子を連れて走っていたので、つい気になって」

プロポーズなど言った自覚は全くなかったのだが、ノーラが乗っている事自体がもんだいだった。

「これから行くところはとても危険なんだ。ファムナを付けるから降りてくれ！」

「貴方は婚約者の一人も守れないのですか？」

シユウはまさかさつきエルに用いた挑発を使われ、面食らったが挑発には乗らないことを選択した。

「守れる確証はないよ」

「婚約者なら命を賭けてでも君を守ってみせるよぐらい言いなさい！」

彼女の場合、挑発とかではなく本気で言っていた様で、イエスの選択しか残っていなかった。

「分ったよ。とりあえず、そこは危ないからこっちにおいで」

ノーラがシユウとエルの間は無理やり体をねじ込むと同時に犬車が急ブレーキをした為、室内が大きく揺れた結果、シユウは前にいたファムナに抱きつく形になり嫉妬したノーラに思い切り背中を蹴られてしまった。

何があったのか前を確認すると、犬車を阻むようにガルガードがいた。

犬語が分るのか、シユウはサトルが犯人グループを追っている事を知り、ガルガードについて行くように御者に伝えた。

ガルガードがとある路地裏の入口手前で止まり、犬車では通過不可能となったのでガルガードの背中に乗る事になったのだが、

「ちょっとノーラはそのまま犬車で帰ってくればよかったのに

「！」

「だって貴方達が勢いよく背中に乗るものだから」

ノリで乗らなくてもよかったノーラまで乗って来てしまう始末だった。

慎重に尾行をしていたサトルは男達が立ち止ったので、例の合流地点に着いたと考えるのが妥当だったので、限界まで近ずき建物の間に体を滑り込ませ潜んでいると、馬車を率いているいかにも犯罪者面した男達が目の前を通過したので、一瞬の隙について馬車の荷台に乗り込んだ。

サトルの予想は的中し、拘束されたメルシアと9人の少女が横たわっていた。

寝ていた為、逃がす事も出来なかったたので馬車ごと奪う事を考え、男達が離れるのを待った。

「あんたがボスか？」

「ボスの代理と答えておこうか。どのくらい商品を調達できた？」

どうやらさっきの貴族風の男はこの組織の幹部か何かだろうと解釈したサトルだったが、一人の目を覚ました少女がサトルに驚いたのか、猿轡をした状態だったが声を出してしまったので、必死のし

ー、としたが手遅れだった。

「荷台が騒がしいな。お前ら見てこい」

別の男が言つと、数人の男達の足音が聞こえてきたので強攻策に出ることにした。

荷台のシートを男が上げた瞬間、サトルは渾身の力で蹴りあげ、気絶させることに成功したが、別の男にタックルされた。

荷台の床に倒されたが、倒れた体制から全男子の急所を蹴り、怯んでる状態の男の顔面を床に叩きつけ、心の中で謝罪した。

荷台に入ってきた男と掴みあいになり、上手投げで外に放り投げ、首を絞めて意識を刈り取ったが、所詮、苦肉の強攻策、反撃もそこまでだった。

暗闇から火花が散ったのが見て取れた瞬間、轟音になった。

髭面の男の構えている銃を見て、サトルは恐怖で動きが止まってしまった。

貴族風の男とその仲間も駆け寄って来て、完全に包囲されサトルは死を覚悟した。

「どこのどいつか知らないが、俺に立て付いた事を後悔して死ぬんだな」

髭面の男がそう言つと、暗闇の路地で轟音になった。

サトルは死ぬ瞬間は走馬灯って奴を見るのかなあと考えていたが、どこにも痛みがない事に気付き、目の前には腕を抑え、うずくまる髭面の男とそいつを撃った貴族風の男が立っていた。

その男「拘束！」の一言で犯罪者達は次々と手錠が掛けられていった。

「協力には感謝するが、命知らずとしか思えない行動をするね、君は」

「は？お前悪い奴じゃ…」

「…いや、潜入捜査的な」

二人の間でもものすごい寒い風が流れた気がした。

その時、犬に乗ったシュウ達がやって来た。

「サトル、助けにきたよ！…まさかあんたが黒幕だったなんて」

「シュザント帝国の王子が人攫いに手を染めるなど、恥を知りなさい！」

「ごみくず」

「確かにその上辺だけの笑顔の裏には何かあるんじゃないかと思っていました」

完全に犯人扱いのトニに好き放題言いだした、シュウ、エル、フアムナ、ノーラだった。

結局、犯人グループはトニの部下が取り押さえ、トニの誤解もサトルの証言で無事とけ、4人は犯人扱いしたことを詫びたのだが、

「陛下、全然気にしてませんから、黒幕とか、恥を知れとか、ごみくずとか、上辺だけの笑顔とか言われましたが」

トニは繊細で粘着質だった。

サトルが上手投げをして、ニードロップをくらわした細身の彼はトニの部下だったらしく、トニの別の部下に担がれて運ばれていたのを見て、サトルは複雑な気分になされた。

結局、シュザント帝国第二王子であり、帝国軍治安維持局という警察みたいな組織のトップにいるトニは奴隷廃止派であり、犯罪組織の駆逐のついでにフルクエンド新国王の即位式に来たらしく、決して危ない人ではなかった。

馬車の荷台から連れ去られた少女達が助け出されたが、眠り薬のせいもあってか、ひどく眠そうな感じでよろよろと出てきた。

彼女達の中には、助かったという実感をえたことで泣きだす者がほとんどで泣かなかったものはメルシアとサトルを見て思わず叫んでしまった少女ぐらいだった。

「メルシア、無事でよかったとても心配したんだからな」

シュウがサトルの言葉なら違和感ないが、なぜかトニがいち早く駆け寄ったものだからメルシア自身もキョトンとした感じだった。

「…えつと、どうして私の名前を？」

誰もがなぜトニが一番に駆け寄った意味を聞きたかったのだが、聞いてはいけない気がして誰も聞かず、メルシアも質問を変えたようだった。

「広場で、ぶつかったときにサトル君が言っていたのでね。それにしても一日に二度もこんな形で再開するとはもう運命としか思えないよ！」

なんだかテンションが上がって来たトニに戸惑ったメルシアは彼の腕から逃れようとしたが、力強くホールドされているようだった。

「メルシア、私の子を産んでくれ！頼む！頼むよー！」

急な求婚で、半泣き状態で怯えるメルシアに盛りの付いた猫の如く飛びつくトニに彼の部下の壮年の男性が鉄槌を加えた。

「殿下、皆様方の目もあるので控えて下さい」

「ぶつ事ないだろ、せっかくいいムードだったのに」

100人中100人が否定するだろう自称いいムードに全員が一歩下がったが、シュウが代表して訪ねた。

「あの…シュザントの王子はどうしたんでしょうか？」

「それがお恥ずかしい話なのですが、殿下の女性の趣味がまだ年端もいかない子供ばかりなのです。」

ここ一帯が沈黙に包まれた後、全員が5歩は下がった。

「あれってロリコンってやつ？」

「あれはロリコンだな」

「やはり犯罪者だったか、恥を知れ！」

「ロリコンってなんですか？」

「ファムナ、貴方は目を合わせないようにしなさい。こんな変態的な御方とは、世も末です」

さっきの言葉よりトニのハートを粉々にしたのは言わずもがな。

「皆、そんな引かなくても…。メルシアはこの見た目で歳は15と聞くと犯罪でもないから」

「そうなのです！殿下の欲求を満たし、なお且つ15歳、もうこんな逸材にめぐり合う事もないでしょう、どうかメルシア様ご慈悲を！」

そういうとトニの部下が全員で頭を下げ、それを見たシュウはバカバカしくなったが、とりあえず困り果てているメルシアを助けることにした。

「そんなことしたら萎縮しちゃって可哀そうだろ。メルシアに考える時間を与えてやれよ」

国王の一言でメルシアは馬鹿連中の包囲網を抜け出す事が出来た。

全員が和やかな空気に包まれていたが、これは油断でもあった。誰もが敵をすべて捕獲したと思ったためだ。敵が男だけとは限らなかった。

助けられた女の中の一人、眠り薬の効果も最初に切れていた女がもつとスリルのある展開と思ったのに呆気ない幕切れにひどく落胆しているノーラに飛びかかった。

全員が虚を突かれた行動に対して後手に回り、ノーラの首元には小型のナイフが当てられていた。

ノーラはもつとも人質に取られて困る人物でもあった。

同盟国とは言え、他国の王女の身に何かがあれば国際問題に発展し、最悪の場合、戦争に発展する可能性も出てくる。

「やっぱり、この女を人質にしてよかったよ」

その女は全員の動きが止まったことを確認し、自分の判断が間違っていない事を認識した。

「いや、お前の判断は失敗だ、殺したければ好きにしろ」

勝ち誇った女に国王がとんでもない事を言った。

「いいのか。殺されると困るんじゃないのか？」

その女の言い回しから派手な服と華奢な体で貴族の女ぐらいの感

覚で人質にしている事を確信にしたシュウは余裕な感じで言った。

「お前はその人質を殺せば切り札を失う。そして、その女は切り札にはならなかったようだ。勝手に殺せばいい」

「そ、そんな…お前は悪魔か！」

まさか人質を殺してもいいと言われるとは思ってなかったのか、女に悪魔呼ばわりされたシュウは意地悪そうな笑みを浮かべると取引を持ち出した。

「だが、俺も人が目の前で殺されるのを見るのはいい気分はしない。そこでだ、今その女を解放すればお前だけは逃がしてやろう。約束する」

「そんなの嘘だ！」

自分だけは助かる道を見出され、心が揺らいだ女はどうやら話に乗ってくれそうだと判断したシュウはさらに続けた。

「じゃあ、殺せよ。その代り、この男共は刑務所行きだけだが、お前は一生特別懲罰室で生かさず、殺さずの凄惨な拷問が待ってるけどな」

「わ、分った！話を呑む。」

話に乗った方がいいと判断した女はシュウの条件を呑んだ。

「では、お前はその馬の所まで行き、女を解放しろ。そうすれば絶対に見逃してやる。俺を信じる」

まるで催眠術に掛かったかのように女は馬に乗るとノーラを解放し、馬を走らせた。

シユウ達が何もする動作がなかったのを見て、自分だけ助かる事が出来た喜びを狂気じみた笑みで表し、高らかに笑った。

が、彼女の目の前には警備隊が待機し、逃亡劇は一瞬で幕を閉じた。

「まあ、僕達から逃がしてやるってだけの話なんだけどね…」

そう言つと、シユウは誰にも聞き取れない小声で囁いた。

「とりあえず、助かったよ悪魔」

（嘘はついてないぞ。まあ、後の事は任せた）

アクセルはそう言つと、足早にバッジの音声を切り、これからもつとも想像できる事を考え、「シユウ、済まん」と呟いた。

解放されたノーレが走ってきて、シユウと抱き合つとノーレは感謝の言葉を述べた。

「ふふふ、私は貴方にとってその程度の認識だったのですね」

「へ？」

なぜか言葉に怒気が含まれているノーレに混乱するシユウ

アクセルの事を言う訳にもいかないので、上手い訳を探して

いる間にノールレの両腕がシュウの首に移動すると、そこで彼の意識は完全に途切れた。

十二話

「…ん、ここは？」

気がついたアクセルの眼前には、心配そうな顔をしているノーラがいた。

「ごめんなさい、せつかく助けてくれたのに…」

「うまく、フォロー出来なかった俺も悪かったから」

エルがうまくフォローしてくれたのかノーラの怒りを収まったり、少し安心したシュウはすでに朝を迎えている事に気が付いた。

「ノーラ、もしかしてずっといてくれたの？」

「当たり前です。私が首を絞めたばかりに」

そういえば気を失う前にものすごい力で頸動脈が締め上げられる感覚を感じたが、華奢な女性に落とされたことが気恥かしくもあったが、死ななくてよかったと心から思ったシュウだった。

「そうそう、元気になるものを食べないと。私が果物剥いてあげますからね」

「ありがと、でも、病気でも何でもないからね」

そんなささやかなツツコミもスルーされ、ノーラは青色のリンゴの様な果物を手に取ると、側に置いてあったナイフでシャリシャリと皮を剥き始めた。

しかし、リンゴの皮など王女様が剥きなれているはずもなく、完成したリンゴは90%が芯と思われる円柱の形をしていた。

「さ、さあ、召し上がれ」

すでに召し上がった後の様なリンゴと皮に張り付いた実の部分を可哀そうに思いながらも口に運んだが、ガチツと芯と歯が当たる音がして気まずい雰囲気になった。

「ご、ごめんなさい…苦手なのに。でも、何かしたいと思って」

やはり彼女自身も上手く出来なかった自覚はあったようで、視線を落として落ち込んでしまった。

「これから練習すればいいよ。上手くないって自覚がある分、すぐに出来るようになるよ」

「そうかな？」

シュウの言葉で励まされたのか、ノーラは少し顔を上げた。

「そうだよ。ほら、見本見せてあげるから」

シュウはそういうと手なれた感じで剥き始め、少し細工してお皿に盛ってみた。

「すごい、うさぎさんみたいになっちゃった！」

ここまで喜んでくれるものとは思わなかったが、彼女の嬉しそうな表情を見ると幸せな気分になった。

シュウは彼女には今は言えそうにない爆弾を抱えながらも、傍から見てもなんだか良いムードになっていたが、この部屋とエルの部屋を繋ぐ扉が開かれると粉々に破壊された。

「アクセルつたらしょうがないな、そんなに一緒に寝たいなら言ってくればいいのに」

まだ寝ぼけているのかシュウにとっては事実無根なのが、この意味深発言でノーラの怒りを買う事は目に見えていた。

「…説明してもらえるかしら？」

声が低くなりこめかみをピクピクさせ、シュウを見つめるノーラ。なぜか手には果物ナイフが握られているので、返答次第ではサスペンス小説にシフトチェンジしてしまう可能性大だった。

「ほ、ほら寝ぼけて思考回路が狂ってるんだよ」

「やましい関係でなければあんな事言いません！それにどうして貴方とエルの部屋が繋がっているのですか！？」

こういった時のノーラの指摘は鋭さが増すのだった。

「それは側近だからしょうがなくで…」

「照れなくてもいいじゃないですか」

この状態の彼女には何を言っても無駄だという事を理解したシュウはエルを彼女の部屋に押し込んだのだが、凄い力で押し戻されるとバランスを崩して押し倒されてしまった。

照れなどした覚えはないのだがこの状態は非常にまずいので、エルを押しつけてノーラに弁明しようとしたが、彼女は目に涙を溜め泣き出してしまった。

「プロポーズされたのに浮気された」

「だから、エルとは何でもないんだって。俺を信じて！」

本気でこの誤解を解かないといけないと思い、ノーラの目をじっと見ていった。

「…確かに醜い嫉妬で冷静さを失ってましたわ。貴方を信じます」

最終的に床に寝転がる女性と見つめあう男女という奇妙な光景を作りだしていた。

「何やってんの？お前ら」

扉から顔だけ出したサトルがこの奇妙な光景を目の当たりにして呟いた。

「それでそんなに疲れていたのか」

アクセルの部屋にて諸々の事を説明し、言われた言葉がこれだった。

サトルが来た後にエルが目覚ましアクセルの部屋で報告する事もあったので、ノーラには退席する事になったのだが、かなり不機嫌になってしまった。

エルはというと要反省という事で正座をさせ、サトルの紹介を済ませた後にアクセルがシユウの顔が疲れている事に気付いたので説明をした結果出た言葉がさっきのだった。

「許嫁がいるなんて説明されてなかったから大変だったんだよ」

「それについては悪いと思っている。まさかノーラが俺を見限らずにいたとは思わなかったからな」

「エルにも困ったものだよ。よく殴るし、空気読めないし、朝弱いしさ」

「俺もよく知らないがエルは昔からそんな感じだ」

そんな二人の会話を聞いていたサトルはエルが可哀そうに思えてきた。

「いろいろ苦勞してるんですね」

「いえ、未熟な私がすべて悪いので…」

エルの周りに暗いオーラを垣間見たサトルだった。

「それにしても昨日の駆け引きは悪魔じみたものを感じたけど」

シユウが本来聞きたかったことをアクセルに投げかけた。

「悪魔とは失礼な。正当な交渉ではないか」

「でも、どうしてあんな簡単にノーラを解放できたの？」

「そりゃ、会話の主導権を握ったからな。あそこでノーラを離せなんて言ったら相手に主導権を握られるからな」

「君がいなかったらノーラを離せって確実に言ってたよ」

「何気なくバッジの通信をオンにして正解だった」

「そうだ、サトルを俺の護衛にしたいんだけどいいかな？」

「信頼できるものを身近に置くのに文句なんか言わない。後、エ
ル、お前に朗報があるぞ」

アクセルの言葉で暗いオーラが発散され顔を向けると急にそわそわしだした。

しかし、アクセルの朗報は彼女にとっては朗報ではなかった。

「影武者を見つけた功績にお前を昇進させる。僕の世話係よりも

やりがいのある仕事だし、これからいい男を見つけるチャンスも得られるぞ」

「よかったね、エル。昇進なんてすごいよ」

鈍感ブラザーズの発言に呆れたサトルはそーっとエルを見るとか
けらも喜んでいなかった。

「その話ですがお断りさせていただきます。アクセル様、シユウ様のお側にいます」

エルは拒絶したが、アクセルは断る理由がよく分らなかったの
念を押した。

「せっかくの昇進の機会だぞ？なんならやりたい仕事に就かしてやるぞ」

「国王陛下の世話係・護衛・お目付役がいいです」

「…今と変わんないじゃないか。魔鉱石産業の重役とか考えているんだが、不服か？」

「私には荷が重いです」

「謙遜するな。お前の仕事ぶりを一番理解してるのは俺だ」

「そんなに私が側にいるのが嫌ですか？」

「嫌とかじゃない。お前の後任はサトルに任せる」

アクセルの言葉でエルはサトルを仇を見るような眼で睨み、サトルはその迫力にびびってしまった。

「却下です」

「ああ、国王の命令だぞ」

「却下です」

「昇進したくてもでき」却下です」
「却下、却下、うる」却下です」

エルの拒否作戦に堪忍袋の緒が切れたアクセルは激昂した。

「お前みたいな役立たず、クビだ！」

「嫌です！」

「クビだ！」

「イヤ！」

「クビー！」

「ヤダ！」

子供じみた喧嘩で議論？はヒートアップしアクセルは止めの一言を言った。

「エルなんて嫌いだ、あっちいけ！」

「……アツ君が苛める。うわーん、お母さん！」

その一言で、エルの眼頭が熱くなると大泣きしてしまった。
エルのキャラ崩壊でサトルは驚いたがシュウとともにアクセルをイジリだした。

「あゝあ、泣かした。」

「い、いや、泣く事ないだろ！悪かった、嫌いじゃないし、クビにもしないから。頼むから泣きやんでくれ！」

アクセルが必死に謝るとエルの涙は止まりだした。

「ホントに？」

「ホントだつて。国王専属第一秘書に任命するから。嬉しいか？」

「うん、うれしい」

「サトルはお前の補佐という形にするから」

こうしておまごとの役決めで言い争う少年少女のようなアクセルとエルの論争はアクセルが全面的に譲歩することで閉幕となったのだった。

改めて、女の涙の脅威を味わった三人が大きなため息をついた事は言つまでもない。

アクセルの部屋にエルを放置しト二達シュザント帝国の一団がいる部屋を訪れたシュウとサトルが最初に目にしたのは、ト二に求婚され困っているメルシアだった。

アリシアさんに関しては娘のピンチにクスクス笑っている。

「さあ、メルシア、俺と結婚しよう。そして私達の愛のけっしびよえ」

「このロリコン野郎やってんだ！」

サトルはギラついた目でメルシアに今にも襲いかかろうとしていたト二に必殺の延髄蹴りを食らわした。

「ぐつ、やるな！だが、私とメルシアの間にどんな障害があろうと決してあきらめんぞ！」

「まず、メルシアが向きあっていないと思うのは俺だけだろうか」

シユウが正論を言っている間に、メルシアはサトルの後ろに隠れた。

「そういえば、謝罪がまだでしたね。今回はこちらの国に大変迷惑をかけました。」

「事前に連絡してくれば捜査協力もできたのに」

「そうしたいのだが、わが国では奴隷も人攫いも事実上容認されていてね。私の部下のみで捜査しているため、あまり情報を漏らしたくなかったのです」

「いずれは廃止することには？」

「そのために王になるんですよ。私の兄は過激な思想と保守的な考えの持ち主ですから王位争奪戦は激しくなるでしょう」

「…大変そうだね」

「貴方の考えも反発するものが現れば、牙を剥く者もいるでしょう。」

「慎重に進めるように考えてます。まず、私が垣根を取り払いますから」

「楽しみにしてます。パーティーでの無礼な言動も失礼ながら貴方の本質を見る為でしたが、噂と違って賢王でした」

トニは少し間を置くと、再び話し始めた。

「陛下には私の協力者になってほしいのです。」

「いいですよ」

シュウの即答に驚いたのか、トニは「いいのですか？」という始末だった。

「変わろうとする国を応援するのは当然かと」

「いや、恥ずかしながら見返りを要求されると思ってまして」

「じゃあ、美人を紹介してくれると助かりますかね」

シュウの冗談でトニは微笑むと「少ないですから骨が折れますね」と冗談で返し、和やかな雰囲気で話し合いが終わった。

シュウはメルシアの視線を感じたので、ファムナの言っていた事を実行する時だと思い、彼女に謝った。

「…悪いのは私です。ごめんなさい、酷い事言つて。正直に言う」と寂しかったんだと思う。二人がどんどん離れていくと思うと悲しくなつて、怒りをぶつけて誤魔化してたんだ、きつと」

メルシアはシュウとサトルとアリシアに何度も頭を下げた。

「こっちこそ配慮するべきだった。でも、あんな危険な所に女の子だけでは行かないでね」

「うん、助けてくれて嬉しかったよ、二人共。でね、私もシュ、アクセルの力になりたいんだ。私もアクセルのお手伝いしたい」

「それは、ダメだよ」

「……やっぱり、私じゃダメなんだ」

「いや、信賴してないとかじゃなくて、サトルから聞いたんだ。メルシアは学生だって。学生時代しか出来ない事もたくさんあるんだ、あせって働かなくても」

「…でも」

「学校を卒業して、それでも力になりたいって思ってくれるんだったら、いつでも歓迎するよ。アリシアさんもそれを望んでるはずだから」

メルシアがアリシアの方を向くと、アリシアは肯定ととれる笑顔を作り、それを見たメルシアも納得したようだった。

「健気な幼女とはなんてすばらしいんだ！メルシアー、是非私の嫁に！」

「あんたが出てくるとめんどくさいからやめろ、ロリコン」

メルシアに飛びつこうとするトニをサトルが服をひっぱり止めたが、トニはロリコンという言葉に引っかった。

「ロリコンとは何なんだ？」

「若い女の子が好きな危険人物だ」

「私にピッタリの言葉だな」

「…メルシア、あんまりト二に近寄っちゃだめだよ」

「…そうする」

メルシアはこれからト二警戒態勢をより一層強めるのだった。

「時間があるときでいいからいつでも宮殿においで。もう、寂しい思いはさせないから」

「えへへ、毎日行っちゃうかもよ」

シュウがメルシアの頭をナデナデしていると、扉が激しく開き、ノラとエウレーネおまけにボロボロのフェーデがいた。

シュウは悪い予感しか与えないメンバーに思わず絶句した。

いきなりエウレーネが抱きついてくると耳元で恐ろしい事を囁かれた。

「アツちゃんなら諦めもあったけどシュウちゃんとは血の繋がりががないってフェーデが教えてくれたわ」

正直、フェーデを睨めつけたいが可哀そうな事をしたので責められなかった。

「やっぱり、浮気者だったのね！」

サトルはシュウをフォローするため、

「国王だったら一夫多妻でも許されるんじゃないのか」

と言ったのだが、この言葉が悲劇を生んだ。

「確かにこの国は一夫多妻の風習はあるけど、……私だけを見て、私だけを愛してくれるって言ったのに側室を娶ろうなんて、……殺してやる」

不気味な微笑みと握られたナイフ、光を帯びていない瞳、そんなノーラがぼそつと呟いた。

「……アクセル、心中しよっか」

今日は部屋にいた全員に一生忘れられない恐怖を感じさせ、ノーラがツンデレからヤンデレに昇華した記念すべき日となった。

ちなみにシュウは過労で三日寝込んだらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6281i/>

ニートな王とイエスな影武者

2010年10月11日21時03分発行